

第10回 むのたけじ反戦塾 手元資料



憲法9条こそが人類に希望をもたらす (むのたけじさん最後の演説要旨)

私はジャーナリストとして、戦争を国内でも海外でも経験した。相手を殺さなければ、こちらが死んでしまう。

本能に導かれるように道徳観が崩れる。だから戦争があると、女性に乱暴したりものを盗んだり、証拠をけすために火をつけたりする。これが戦場で戦う兵士の姿だ。

こういう戦争によって社会の正義が実現できるか。人間の幸福は実現できるか。

戦争はけして許されない。それを私たち古い世代は許してしまった。新聞の仕事に携わって真実を国民に伝えて、道を正すべき人間が何百人いても何もできなかった。戦争を始めてしまったら止めようがない。

ぶざまな戦争をやって残ったのが憲法九条。

九条こそが人類に希望をもたらすと受け止めた。そして七十年間、国民の誰も戦死させず、国民の誰も戦死させなかった。これが古い世代にできた精いっぱいなことだ。道は間違っていない。

国連に加盟している何処のクニの憲法にも憲法九条と同じ条文はない。日本だけが故事のようにあの文章を掲げている。

必ず実現する。この会場の光景をご覧下さい。若いエネルギーが燃え上がっている。至る所に女性たちが立ち上がっている。新しい歴史が大地から動き始めた。

戦争を殺さなければ、現代の人類は死ぬ資格がない。

この覚悟をもってとことん頑張りましょう。

第10回 むのたけじ反戦塾

日時：2024年11月16日（土）
13:30～17:00

会場：文京区民センター3C会議室
(地下鉄春日駅2分・後楽園駅5分)

プログラム：

- ① 映像上映（52分）
 - ・「むのたけじ 緊急講演会『戦争を考える』」「戦争とジャーナリズム」
- ② 感想、報告と提案：
 - ・講演映像を聞いての感想などから。
 - ・「むのたけじ反戦塾」これまでの9回の話合いのまとめとこの後の展開についての提案資料②「本の構想」を参考に
- ③ 自由討論：今こそ、むのたけじの反戦『戦争はいらぬ、戦争をさせぬ世へ』
 - Q：今、私たちを取り巻く戦争の危険とは
 - Q：戦争をさせぬために何が出来るか？参加者、それぞれが今考えていること、問題としていることの出し合い・話し合い
 - Q：昨今の我々を取り巻く国際情勢、政治状況、社会情勢などから考えていることなどもこの際出し合いたいと思います。
- ④ これからの「むのたけじ反戦塾」提案

【この手元資料の内容】

- | | | |
|-----|--------------------------------------|---------|
| 資料① | 第10回 むのたけじ反戦塾は… | P.2 |
| 資料② | 本の構想 | P.3～4 |
| 資料③ | 第9回むのたけじ反戦塾
(2024年8月17日)の記録 | P.6～17 |
| 資料④ | プレ会から始まった塾の第1回～第3回
「むのたけじ反戦塾」のまとめ | P.18～19 |
| 資料⑤ | 参考資料「たいまつ 新モンローが必要では」むのたけじ2016年 | P.20 |

資料① 第10回 むのたけじ反戦塾は…

「むのたけじ反戦塾」は10回目を迎えます。

前回の8月の9回目の回以来、3ヶ月の間に、私たちの政治の状況は次々と大きな変化が起きつつあります。それも、とても「好ましい」とは言えない変化が。

何も変わらないことへの怒りや焦りから、漠然としていた「不安」が、はっきりとした変化への戸惑いへと代わりつつあるように思います。この変化、そしてその先にあるものをどう捉えていったらよいのか？

でも、そうしたときだからこそ、私はむのたけじさんがその著作の書名に残した「希望は絶望のど真ん中に」という言葉を、そして、その言葉の意味するものを思い返してみたいと思うのです。

10回目を迎えて、「戦争はいらぬ、戦争をさせぬ世へ」の実現のために、私たちはどう考えていったらよいのか、少しずつ議論がかみ合ってきたような気がします。この反戦塾の議論はひとまず12回目を、考えていること、考えてきたことを出し合う区切りとしたいと思いました。

さらにその成果を出来るだけ具体的にまとめていって、私たちがこの間、考えて話し合ってきた「戦争はいらぬ、戦争をさせぬ世へ」実現に向けて、社会に発信していけるように、この後の会の11回目（3月？）、12回目（5月？）の反戦塾の議論の場を創っていきたくて考えました。

そしてそれを戦後80年、安保法制10年目の2025年8月に向けて、（その10年間、私たちが戦争を考える上で何があったかをきちんと整理して）まとめて、発信したいと思えます。

そこで、これまでどのような話し合いがなされてきたかを振り返りました。毎回、テーマを強く縛ることをしてこなかったのが、いろいろな話題が出ていますが、毎回中心に話し合われるものを見つけることができました。

第一回から第三回の反戦塾では、自己紹介が中心でしたが、憲法9条の戦後80年の中で果たしてきた役割とその限界についての話題が多くありました（この資料の18から19ページ参照）。

第四回から第六回は、たとえば自治体レベルでの抵抗など、工夫した抵抗など次の世代に伝えたいものがたくさんありました。どのようにして若い世代に伝えるか、が話し合われました（第11回手元資料に掲載予定）。

第七回以降は各回ともに活発な議論がなされました。第七回は「自衛隊をどうするか」で、第八回は「戦争をおこさせないようにするには」というテーマで、市民運動体の連携、教育、選挙での工夫など多様な意見が出ています。

第九回は資料⑥ 第9回むのたけじ反戦塾（2024年8月17日）の記録」を読んでみて下さい（まとめは第12回手元資料）。

そこで、今後の予定になります。

今回、第10回は、「戦争とジャーナリズム」というテーマでのむのたけじさんの講演を見直します。

戦争とジャーナリズムのことは、むのたけじにとって切っても切れないことになりますので、ジャーナリズムへの思いなどの話を中心に考えています。

第11回（2025年3月？）は、私たちが反戦活動をする場合はほとんど市民活動になります。市民活動についての思いなどを中心に話し合うことができればと思います。

第12回（2025年5月？）は、「戦争はいらぬ、戦争をさせぬ世へ」とはどんな世の中か、これまでの話をまとめながら、8月に向けた話し合いができればと考えています。

話し合ったことを中心にして、次に提案する本（本資料3～4ページ参照）のようなものを出せると良いと考え、努力していければと思います。

【プログラム】

日時：2024年11月16日（土）
会場：文京区民センター 3C会議室

13:30～14:30

① 映像上映（52分）

- ・「むのたけじ 緊急講演会『戦争を考える』」
「戦争とジャーナリズム」2015年8月25日

14:30～15:00

② 感想、報告と提案：

- ・講演映像を聞いての感想などから。
 - ・「むのたけじ反戦塾」これまでの9回の話合いのまとめとこの後の展開についての提案
- 資料②「本の構想」を参考に

15:10～16:30

③ 自由討論：今こそ、むのたけじの反戦『戦争はいらぬ、戦争をさせぬ世へ』

- Q：今、私たちを取り巻く戦争の危険とは
 - Q：戦争をさせぬために何が出来るか？
- 参加者、それぞれが今考えていること、問題と
していることの出し合い・話し合い
- Q：昨今の我々を取り巻く国際情勢、政治状況、
社会情勢などから考えていることなどもこの際
出し合いたいです。

④ これからの「むのたけじ反戦塾」提案



むのたけじ緊急講演：映像上映

DAYS JAPAN 講演会（いま、戦争を考える）
戦争法案が押し進められている今だからこそ
伝えたい本当の戦争の姿

「戦争とジャーナリズム」

【日時】2015年8月25日（火）

19:00～21:20（18:30開場）

【会場】なかのZEROホール 小ホール

むのたけじ

1915年、秋田県生まれ。36年 東京外語学校（現・東京外大）卒業。報知新聞を経て朝日新聞の社会部記者。従軍記者として中国やジャワ島などの戦地取材した。1945年8月15日に戦争責任を取る形で自ら朝日新聞を退社。48年、秋田県横手市で週刊新聞「たいまつ」を創刊。78年の休刊まで30年間発行し続けた。近著に「99歳 一日一言」（岩波新書）「日本で100年、生きてきて」（朝日新書）「100歳のジャーナリストから きみへ平和」（汐文社）がある。

資料② 本の構想 (1)

本の構想

「むのたけじ反戦塾」として開催されるようになってからでも2年近くなり。今回でちょうど十回になります。皆さんの発言はその時だけのものにしなくて、その都度文字起こして次回の手元資料に掲載してきました。しかし、多くの方が発言するために話が一方通行になってポイントがバラけます。そこで、できるだけテーマごとにまとめて、しかも要点だけにしつかりやすくしたものをつくり、このたびの手元資料の最後の方に載せてあります。これは、皆さんの全ての発言を網羅することはできませんでしたが、どんなことを話し合ったかわかるようにしていますつもりです。

こうした特別専門家を招かない市民だけでの話し合いすることは、まさにむのたけじの「希望は絶望のど真ん中に」の第4章にある「みんなの課題はみんなで行く」に通じる。つまり、「古代ギリシャ以来のわずかに二〇数世紀を振り返っても、英雄や偉人や天才・超人や豪傑なんかをかつぎ出して、その言説や行動で人間を救済し世の中を改造する試みは幾つも行われてきた。それがみな空振りに終わったから、現在のよう人類の現状があるわけだ。個人の超能力に期待して失敗した人類は、次にグループでの行動を考えた。仲間を誘い、同志を募り、徒党を組み、党派を組むなどして種々の社会運動や革命運動、思想運動、文化運動、信仰運動などを展開した。どれも一時の徒花を咲かせただけでしたな。」です。これからの世の中では、英雄や偉人などに頼らず、私たち自身が望む世の中を話し合い、それを実現するために私たち市民が行動する時代を迎えているという試みの実験にもなりました。

しかし、反戦塾の発言をまとめただけでは報告集にはなっても、多くの方が読んでもらう一般書にはなり得ない。多くの人に読んでもらうには、一般書として出すことが求められるように思います。とりわけ、来年は戦後80年にあたります。そして、反戦塾に参加している人のほとんどがその時間の多くを共有して生きてきたわけです。だから、その時間にあつたことを残すことが求められていると思います。

もう一つは、私の個人的なことになりますが、むのたけじの岩波新書「希望は絶望のど真ん中に」を作るのを手伝うにあたり、日本の若い世代の指針になるような本にしてほしいと希望を言いました。それに対する父は、「これから10年ばかり、世界は大きく変わる、それをみてからでないとそのような本は書けない」と答えました。むのたけじはその10年を待たずに2016年なくなりました。そして、今、本が出て13年になります。やはり、この10年で大きな変化があったように思います。それを踏まえ、参加者と力を合わせて、なんとかむのたけじの十数年前の思いを実現しようという思いです。

そこで、本の内容は4つの柱を考えています。戦後80年の平和運動は、今度のノーベル賞受賞でも話題となった核兵器廃絶運動、反安保闘争などいろいろあります。ここでは、安倍政権の集団的自衛権の容認によって骨抜きにされ、いま改憲論争などもあって現在進行形であることから憲法9条について扱いたい。憲法に関するむのたけじの考えは亡くなる少し前の2016年5月3日の有明防災公園でおこなわれた憲法集会での話に凝縮しているように考え、この点を「むのたけじ反戦塾」の討論の一つの柱にしています。

そこでは、戦争というものが相手を殺さねば、こちらが殺されてしまうという道徳感が崩れたものだ。このようなもので社会正義も、人間の幸福もが実現できるわけがない。この経験をしてきて残ったものが憲法9条戦争放棄。この憲法9条のもとで、日本は曲がりなりにも戦後70年間以上国民の誰も戦死させず、他国民の誰も戦死させなかった。しかし、日本国民はこれをありがたがるだけで、どうも憲法9条を守れば、平和が実現できると錯覚した。そして、戦争を殺さねば、現代人類は生きる資格がないと結んでいます。このようにむのたけじは憲法9条が戦後日本の精神的支柱であって、しかも戦争に直接加担をせずにこられたことを強調しています。

その一方で、「希望は絶望のど真ん中で」の序章で「交戦権と軍隊と兵器の所持は、国家であることの条件で有り、資格だ」と述べています。この点に関して、多くの議論がなされましたが、それを外国人からどう見られていたか、憲法9条をただ守るだけで具体的に平和に貢献できるように、そして世界に広めていくことをしなかったことの反省を言おうとしただけでないかなどの議論がありました。

しかし、この有明で9条を生かして平和にするための方策に関連する発言として、むのたけじは「世界は一つになれる。次第に一つになりつつある。人間が長く地球に生きて行くにはその道しかない」と9条を重く捉えています。この憲法9条の精神を広げて、世界の各国に同じ条文がその国の憲法に入るとなると、条文にある、「正義と秩序を基調とする国際平和を誠実に希求し、国権の発動たる戦争と、武力による威嚇又は武力の行使は、国際紛争を解決する手段としては、永久にこれを放棄する。」となるわけだから、まさに「戦争のいらぬ やれぬ世へ」となるわけです。それができなかったのがむのたけじの世代の限界だったと話がありました。2016年に集団的自衛権の行使容認を柱とした安全保障関連法案が成立し、実質この憲法9条の骨抜きにされ、さらに憲法そのものを変えようとしています。憲法9条は戦後日本の平和運動の精神的支柱であり、日米安保条約、日米平和委員会などでアメリカに押さえつけられていた日本が外交で唯一独自色を出せるツールでした。そして、むのたけじが亡くなった2016年に成立した安保法制は米軍との共同の集団的自衛権行使が現実のものになると危惧しておりましたが、今現実のものとなっており、確実に日本が戦争のできる国に変わってきていることはあきらかです。条文が残っても、実質的機能しないものになった時、我々の世代がどう向き合うべきか、もう一度考えてみたい。

つぎに、今後のことを考える上で、むのたけじが将来に対する手引きが書けない理由としたあげた変化の大きい10年の間にどのようなことがあったかです。まだ、2011年当時は翌年成立した安倍内閣でも企業のグローバリズム化が経済の成長戦略に捉えられているから、まだグローバリズムというものがまだ残っていたと判断できます。

その後、先進国での貧富格差拡大、そして中国の台頭、相対的にアメリカの影響力の低下ということからか、かつての東西冷戦をおもわせるブロック化が見られ、国際情勢も大きく変わってきています。それが顕著に現れたのがヨーロッパで、東西冷戦が終結し、1991年ワルシャワ機構が解散したら、その相手側のNATOもまた役割を終え、解散するべきであったのに、その後も存続するだけでなく、加盟国を拡大していった。それだからと言ってロシアのウクライナ侵略は許されるものではないが、2022年にウクライナ-ロシア戦争になったのではないかな。これによって、ヨーロッパ諸国がロシアから輸入していた天然ガスなどのエネルギー資源を縮小させ、それまでのエネルギーの分業を通しての融和政策がなくなります。

一方、アジアに目を向ければ、QUAD(クアッド)と呼ばれる政府が自由や民主主義、法の支配といった基本的価値を共有すると言って、日本、アメリカ、オーストラリア、インドの4カ国が枠組みを作って対抗意識を強めます。それに伴いと言っても良いと思うが、石垣島、南西諸島にミサイル基地をつくり、防衛省の2025年度予算概算要求が8兆5000億円で過去最大になるなど明らかな軍事力増強が見られます。こうした動きは「台湾有事」などいかに中国が台湾を攻めるといような単純なイメージを植え付けようとしているが、結局中露を封じ込めようとする世界の動きの一つと理解するべきではないかな。そして、むのたけじは「第3次世界大戦は米中露が2対1になれば危険」と話していましたが、このことも気になります。

日本においては、アメリカを中心とするG7を構成する国の中心に考えているが、こればかり見ても良いかと思う。いまやブラジル、ロシア、インド、中国、南アフリカの頭文字をとったBRICSとよばれる国際会議ができて、新たな経済圏を作られ始め、現在9カ国が加盟しているが、多くの国が関心を持って見ているようです。(次ページへつづく)

資料② 本の構想 (2)

このような世界は絶えず動いていることをわからなければならぬし、状況把握を間違えられないようにしなければなりません。そのためにはやはりマスコミに情勢判断を間違えないようにして正確な情報を伝えてもらうことが大切ですね。また、我々市民も情報取得の手段はいろいろあるから、広く関心を持って、自分で判断するようにしなければならぬと思います。

少なくとも、父が願ったように世界が一つになって、地球の問題を解決するにはならず、かつての東西冷戦時代を思わせる、時代に逆行した世界に生きているということわからねばならないように思います。この10年で確実に戦争に向かう歩みを進めているように思えて仕方がありません。

もちろんこうした戦争へ向かう流れに抗(あらが)う動きがありました。とりわけ大きな動きは集団的自衛権の行使容認を柱とした安全保障関連法案反対運動は、多い時で若者や学者、母親など多様な約12万人(主催者発表)もの人が国会前に集まり、抗議した。他にもこれより規模は小さくなりますが、たくさんお集会がありました。私は父・むのたけじを集会会場に連れていく、見ていましたが、熱気がありましたね。それが2015年9月に成立すると、それ以降は徐々に少なくなつたように思います。象徴的なのは、2016年8月に若者の新しい市民運動として話題をまいていた自由と民主主義のための学生緊急行動(SEALDs)が解散し、いくつかの団体に分かれたことです。また、法案が成立したことで戦術を変えて戦うためにいくつかの団体が生まれました。

その一つは法廷闘争をということで、2016年4月から7699名の原告、1685名の代理人弁護士が全国22の裁判所で25の裁判を提訴して争うことになり、それを統括する安保法制違憲訴訟の会が2015年9月にできています。私は原告にはなりませんでしたが、仲間の誘いで安保法制意見訴訟埼玉の会の集会などには参加していました。2024年になると、最高裁の棄却という判断がおり終わります。私はこの棄却という、国家がよくやる「すり替え」です。弁護士さんの説明を受けるのですが、やはりわからない。私は教員ですから、○×で答えるテスト問題を出すのですが、学生が△と答えられ戸惑いを感じているようなものと捉えると良いようなものと理解しています。2024年7月10日に参議院議員会館で結びとも言える市民集会「とりもどそう立憲主義と平和憲法」が催されましたが、「これからはもう一度市民活動に戻らねばならない」という元の運動に戻るという奇妙な話で終わりました。

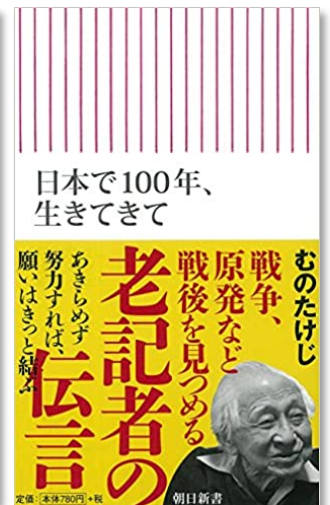
もうひとつは2015年の12月に安保法制の廃止と立憲主義の回復を求める市民連合が(市民連合)結成され、安全保障関連法廃止を訴える野党統一候補を支援する運動が始まります。市民連合の運動は、2016年参院選、2019年参院選と順調でしたが、2021年の衆議院選挙においては外部からの異論などもあり、野党共闘の議席減少し、市民連合と政党の間で次第に溝ができていくように見えます。2024年の衆院選では野党強雨とは全く行われなかったのに、野党の大躍進を遂げます。ただし、一応野党が議席数だけから見ると多いのに、連携ができず、おそらく政権奪取にはならないでしょう。いずれにしろ、安保法制反対闘争から生まれた運動はいずれも萎んだ。安保法制に反対する運動が始まった時に懸念していた戦争への危機がより鮮明に感じられるようになって今、なんとか戦争に巻き込まれることを止めようとする市民集会はあるけれど、どの会場を見てもかつてのような市民の熱気というものがなくなっていました。一旦法律が成立すれば、市民は諦めてしまうのか。むのたけじは「諦めることを諦めろ」と言っていましたが、そうしなければならぬという想いです。

安保法制に反対する市民活動は軍拡が進んでいく中で必要とされる運動であるはずなのに、力を失っている。市民活動はやりっぱなしでよいのか、なぜ力を失ったか反省することがなくてよいのかと思いました。しかし、私は安保法制反対運動では父を集会に運ぶのみでした。違憲訴訟では原告でもありませんし、時々集会に参加するのみでしたから、詳しいことはわかりません。

私が本格的に市民運動に参加するようになったのは2018年6月「むのたけじ地域・民衆ジャーナリズム賞」に参画するようになってからです。この賞は、地域に根差し、民衆のために報道する個人、団体を力付けようとするものでしたが、私にとってほろ苦い結末を迎えました。その経験も踏まえ、市民運動における問題点を探ろうと思います。

こうした反省のもと、「むのたけじ反戦塾」は、大きな目標として「戦争のいらぬ やらぬ世へ」に向けて何ができるかを考えるということはあるのですが、その他のこと、例えば誰が代表で、具体的にどういう活動をするかなども決めずに始められました。参加者の意向で順次決めていけば良いという考えで進められました。2から3ヶ月ごとに、むのたけじを扱ったドキュメンタリーや講演会の模様を放映し、「希望は絶望のど真ん中に」の一部やその時々話題などを材料として提供し、徹底的に話し合ってもらっただけの会です。少しだけ工夫とすれば、話し合いの内容を文字起こしして次の反戦塾に提供しているくらいです。人数がそれほど多くないが、これも人数が多いと議論が深まらないという事情によるものです。自己啓蒙的集まりでしたが、反戦塾だけで2年近く続けられてきました。私は、情報通信機器の発達で互いに顔を合わせないで意見が飛び交うことが多くなりました。そして、自分たちの住んでいる自治体の方向性、国の方向性も、紙切れに人の名前を書くだけになりました。そうした世の中で、人類が誕生からしている顔を合わせて議論して、考えをまとめるということがとても大切なように思うのです、そうして出てきた意見を、ここで提供したいと思います。

具体的話は、いま各回のとめをしている段階ですので、それが終わってから考えたいと思います。



資料③ 第9回むのたけじ反戦塾（2024年8月17日）の記録（1）

※「むのたけじ反戦塾の記録」は、毎回、参加者のみなさんの話されたことを書き起こして、次の回の手元資料に掲載させていただきます。ひとりひとりが、今考えていること、問題だと思っていること、あるいは「戦争はいらぬ、戦争をやらぬ世へ」という反戦への思いを出し合うことが最も大切だと考えているからです。

また、みなさんのお話したことを書き起こし、記録とすることを通して、この「反戦塾」に直接参加していない人にも、みなさんが考えていることを伝えていくことが出来ると考えてます。

しかしながら、録音したもののから書き起こしているのですが、採録者の知識と教養の無さから、よく聞き取れなかったり、わからなかったりしたところがあります。採録しながらもこれは間違いではないか、と思いながら文字起こしているところ（？）や（***）で表示）があります。

ご自分の発言と思われるところで、間違いがありましたら、お知らせ下さい。修正して正しい記録としていきます。



第9回 むのたけじ反戦塾 2024年8月17日

●司会：

今回が「むのたけじ反戦塾」という形で行っている9回目なんですけれども、その前に3回ほどプレ学習会みたいなことをやっていて、全部で12回目になるかと思えます。

私は「憲法を考える映画の会」というのをずっとやってきたんですけれども、その中で、すごく安倍政権の時代からですね、戦争への準備と言いますか、南西諸島のミサイル配備の問題であるとかいろんな形でどんどんどんどん進められているのに、ほとんど、多くの人がそのことに無関心のままにいるというところで、何かそういったことについて役立てることができないだろうか、反戦ってということについて考えていくことができないだろうかと思ってこの会を始めました。

ちょうどその時にむのたけじさんのですね。2016年の憲法集会でのお話と言いますか、戦争をなくす、訴えていた「戦争はいらぬ、戦争をさせる世へ」と言うんでしょうか映像を見せていただきまして、むのさんが晩年、「戦争してはならない」というお話をされているのを映像で見ても、みんなと話し合っていくとくに、むのさんがどういう風なことで反戦ということをこう訴えているかっていうこととともですね、自分たちが今どういう状況にあるのか、あるいはその中で自分たちにできることってというのはどういうことなのかという風なことで話を進めていきたいと考えてこの会を始めました。

30人から20人ぐらいの人数ですね、とくにあの勢で、人が多くなって、誰かの講演会をするとか、誰かが知っていることを話すってということよりもですね、一人一人の方がどんなことを考えて、あるいは今の状況ってというものに対してどういう風なことを考えているか、その中で、自分と同じと思うことに

気づき、どういう風にしたいかっていうことがなかなかつかめない人がいるのではないかって思って、そういう人たちが一緒になって、それぞれの考えてること、知っていることを、あるいは危機感として感じていることを出し合ってますね、その中から自分たちの動き方って言いますか、方法を考えていくっていう趣旨で始めました。

最初の頃は、人も30人ぐらい集まったんですけども、続けていく中で、だんだん同盟者って言いますか、熱心に来てくれる方と一緒にどういう会を続けて、話し合われたことをですね、単にその時の話だけじゃなくて必ず記録っていうか、記述していくことをやっていますが、同時に、ここに来ることができなかった方、毎回毎回必ずしも来れなかった方にも、それを見ていただいて、共有するって言いますか、こんな考え方が出てきたってことを共有していくような継続的なものにしていくと思っています。

8回目がこの間行われたんですけども、今回、その記録を9回目の手元資料ってところに載せています。そうして話がだんだん噛み合ってくるようになってですね、私としてはこの辺りでちゃんと今までやってきたこと、あるいはそれぞれの方の発言ってものをまとめて行って、これからの話をさらに煮詰めていけるような、あるいは具体的な行動とかそういったものにこう考えていけるようなものにしていきたいと考えております。

今回ですけれども、いつもはもうちょっと狭い部屋でやるんですが、むのさんが亡くなったのが8月の21日ですから、今年が8回目の命日なんですけれども、ちょっと話を広げて少し大きめの部屋でやるってということで、去年も一昨年も8月の今頃にやってきたんですが、準備がなかなかできなくて、今月は映画会を8月の11日にもやったので、1週間間に準備が大変で、十分でなかったんです。もともとこういった手元資料も1週間ぐらい前には皆さんのお手元に届くような形ですね、今まで参加した方には、お送りしてたんですが、それもちょっと遅くなってしまって、いろいろ反省点が多いんです。もう一度今回のテーマとして、むのたけじさんが訴えていた反戦への思いと言いますか、その中身と言いますか、そういったことについて、我々の出発点である2016年の憲法集会であるとか、あるいは一番最後にテレビ放映された作品をですね、見直して、この2つは2021年の3月に「プレ学習会」っていうのをやった時に上映した作品なんですけれども、それをもう一度見るところから始めてみようと思いました。それと、むのさんの、この（手元資料の）後ろにも載ってますけれども、『希望は絶望のど真ん中に』という一番最後に岩波新書に書かれていたものがちょうど少しずつ、一章ずつ今まで掲載してきたんですけども、それがちょうど区切りなものですから、その辺りでむのさんのことについて、あるいはとくに反戦について訴えていたことそれがどういうことなのかってところをきっかけにお話を進めていきたいと思っています。

その後は、またいつもやっているように今の戦争の危険っていうのはどういったところにあるのか、それに対して自分たちはどのように動いているのかということについての割とフリートークと言いますか、そういった形でやっていきたいと思えます。

長くなりましたけれども映像の方を見ていただいて、その後、またちょっとお話をさせていただきます。映像の方はですね最初が2016年「憲法有明集会」での、むのたけじさんの反省の訴え、これが10分です。それからテレビ番組で『まだ101歳、むのたけじ戦争を殺す日まで』25分、という2つの作品をまず見ていただいて、その後、ちょっと感想などをお聞きしながら話をしていきたいと思っています。

〈映像上映〉

『2016年有明憲法集会でのむのたけじさん反戦の訴え』上映（10分）

『まだ101歳、むのたけじ戦争を殺す日まで』上映（25分）

（次ページへつづく）

〈討議〉

●Y.K.:

皆さん、はじめまして。私、現在山梨県に住んでおります。秋田県で秋田県能代市で生まれたY.K.と申します。よろしくお願いたします。秋田人の誇りですね。志半ばで、亡くなられたと言うことで、無念な思いがなくなれる時にはあったのではないかと想像しますがね。是非とも私たちは、むのたけじさんの志を継いで、最後の方でおっしゃってましたけども、戦争を無くす方に動いたなという感覚をね、是非とも味わいたいものだと思います。考えて見ますと、この地球上にいます人類のですね、戦争主義者というのは圧倒的少数派です。一方平和主義者というのは圧倒的多数派です。私たちが勝てないはずがないんです。これが繋がってないから勝てないですよ。見事に分断されてるんですね。この圧倒的少数の戦争主義者たちが実に狡猾なものですから、実に狡猾で実に周到なんです。私たちがぜひ、用意周到な意味、狡猾であってもいいのかもしれませんがね、そのそういう平和主義者になりたいなと今、映像を見ながら思いました。

●K.K.:

はじめまして、K.K.と言います。みなさんどういうふうに思ってるか分からないんですけど。私は、モヤモヤモヤモヤして、ニュースや新聞、雑誌、いろいろな見るたびに、まあ、どうしてこんなに、ガザにしても、ウクライナにしても、一部のね、人たちの思いでこんなことが起きてるのかと心苦しいんですけど、第一次世界大戦、第二次世界大戦のこの前の戦争の、映像とか番組とかが今ありますよね。いっぱいね。なるべく見るようにしてますけど、皆さん止められなかったっていうのはもう、毎回、毎年、毎年見て心痛いんです。で、いつもモヤモヤしてます。

私一つ言いたいのは、私個人的に耳が聞こえないんですよ、あんまり良く。この映画会にもたくさん来るんですけど、私はどれくらい聞けるかわかんないんですけど。60%位じゃないかと思う。英語で話して、日本語字幕が出てると、ある程度わかるんですけど、今でも、むのさんの言葉が聞きにくいですよ。そうすると、ちょうどいい時に、私は聞けてないんだと思うんです。それから、こういう場に来てお話し合いをしますよね。すごくいい話をするのかなって思ってるんですけど、でもここではまだ私はちゃんと70%位しか聞いてないのかなって。そう言う思いがいつもあってモヤモヤもしてます。だからいつも映画会に来てもちよっと、わかんないんです。それから今日午前中、地元の平和を望むというか、戦争反対の集会にいました。10時半から駅前ですけれども、いろいろなスピーカーがいますよね。いろんなこと、最近の様子とか、戦争とか、どっかに取材した(?)ところがある自分のご意見を言ってくれるんですけど、それもきちんと聞けないんですよ。耳が悪いから。補聴器を付けてるんですけど。

落語聞いてますでしょ、落語聞いて最後にオチがありますよね。オチがある時にだいたい小さな声でゴソゴソと言いますよね。そうするとその意味がわからないですよ、聞けないんです。で、みんなどうって笑いますよね、みんなおかしいんだ、何でおかしいんだろう、だから、それはすごく自分ではマイナスのことなんだけど、こういう人っていっぱいいるんだと思うんですよ。だから集会にしても、私心がけてるのは、話の上手な人はまあそれだけでいいんですけど、話の下手な人っているんですよ。滑舌が悪い、それからちゃんとまとまてない人もいるんですけど、でもそういう中にすぐ〜素敵なことを言ってる人がいるんですよ。だからそれをどういう風に探るかって言うのが、自分の中の課題なんです。本当、下手な人ほどね、なんかすごくいいこと言ってることがあるので、ということの前に言ったんですけど、こういう話し合いに行くと、「私は役に立たないな」と思うことがすごく多い、話し合いもできてない、話がちゃんと受け取れてない、でも70% (?) だったら、まあいいかな、と。そういう楽天的な考えで、来ないよりいいんじゃないかなと思ってます。私はいつも映画も見にいたり、話し合いとか、集会にもできる限り行って、最近の自分が落としてるというかちゃんと考えなきゃならないことを知らなかったとかいうのを、補強しようと思っかけてきます。

だから今日の話し合いの中で、私はどれだけ分かっているのか、どれだけ吸収できるか、不安がいつもあって、いつも思っていくんですけど、それはそれで自己満足ですよ。自分の中で、いいのかな、こんなこと言ってる。

原点はいろんな勉強していくと、さきの戦争で女の人の立場っていうのはね、男の人は戦争に行くの一番の価値だあって、一番の素晴らしいものだ、自分の息子を、兵隊に出すというのが、すごく名誉なことであって、子供達も、ついこの間もニュースでね、昔の校長先生が「お前たちは戦争に勝ちたいか、負けたいか」って、校長先生が全校児童の前で言うんですよ。「勝ちたい人、手をあげる」って。全部、手を上げるんですよ。当然ですよ。そういう世の中に生まれてきてそういうように育てられてきた人たちが、ああいう風に言ったのはまあ、流れなのだな、自分もあの時代にいたらしようがないんだなって。で、今、歳を取った人も、澤地さん(?)とか話を聞くと、自分は軍国少女だと、ああいう風に反戦の運動に立ち向かう人になるじゃないですか。やっぱりああいう人たちも若いときはそうされてたんだと、ね。そこで、抗うってことが出来なかったんだらうって。しょうがなかったんじゃないかって言うのもあるんですね。で、むしろ私たちが聞けない、ちゃんと言われたことがちゃんとわかってない人間が、御上に対しても、または御上だけでなく、普段のことでも、みんなが言ってるのがちゃんと分かってない人間が、自分の力で正しい道を考えて言うのは無理だと思うんです。でも、その中でも少なくとも、私は、愛国婦人会ってあったじゃないですか。愛国婦人会ね。だから男の人は戦争に行くって言うのが価値が一番よかった。女の人は、もう参加できない。もう何にも役に立たないものだと言われたんだけど、戦争になったら女の人が役に立つという、軍需工場に行くと働く、で、女の人が婦人会として、男の人たちをバックアップすると、そう言うので喜んで働いてた景色を見るんですよ、私、映像とかですけど。私はああいう愛国婦人会のような人になりたくない。だからそう言う世の中の流れの中でそう戦争を賛美していく応援団には絶対ならないと。だから少しでもわかる範囲で、どっかで聞いて、どっかで言い判断が出来るような人間になりたい。戦争を止めるとか、そういう大きなことにならないけど、少なくとも婦人会のような運動にはなるまいと、するまいと。そういうような消極的なあれですけどね、こう言うところに、いろんなところに話を聞きながら、聞いてもらいたいと思って来てます。いいですか、すごい長くなりましたけど、そんな気持ちで、そんなだいたいそれ事ではないけど。

●武野:

今、非常に大切なことをいってたと思います。むのたけじもよく言ってたのは、戦争は戦場でやるものではないんだ、第2次世界大戦で東京に空襲があったり、女子供が一番被害を受ける、それが戦争なんだってそういう言い方をしました。現在の戦争を見てみなさい。要するにウクライナだって、戦場で戦車同士がバンバンやるわけじゃなくて、一般の町中で爆弾を落としたり、普通の住んでるアパートを攻撃してるわけですよ。要するにそこに秘密基地があるとかなんとかってそういうようなことを言ってる。だからかつてのヤアヤアって言う戦国時代の、あの時代もそうじゃなかったかも知れないけど、ああ言うような戦争じゃないんだ、今の戦争は、要するに市民と市民を殺し合うそういう戦争なんだ。

で、それはウクライナでも同じですし、ガザでも同じだと思っんです。だから戦争はもうやめさせなきゃいけないっていうのが父、むのたけじの意見だと思います。ちょっと付け加えたんですけど、とても大切なこと言うてると思うんです。戦争に反対するっていうのはどういうことかっていうことを、もうちょっとまとめたと思っんですけどできてないんで、次にはまとめてきます。(次ページへつづく)

資料③ 第9回むのたけじ反戦塾(2024年8月17日)の記録 (3)

●S.A.:

戦争を無くしていくということについて、日本が戦争に入っていくかというところについて最近非常に絶望的な思いが強まっていて、南西諸島へのミサイル配備であるとか、その台湾有事がどうのこうのとか考えるにつけて、非常に気持ちが暗くなっている、戦争でまあ、お金儲けをする人たちがいるんだから、簡単にはやっぱり戦争がなくなるんだよなと、今も見ながら思っていた中で、先ほどお話を「平和主義者の方が圧倒的に多いんだ、圧倒的多数である我々が少数者のその戦争主義者に負けるわけがないんだ」というお話をさっき伺って、それは非常に心強い言葉だなと思って、感銘を受けました。非常にいい言葉だと思って、「そうなんだよな」って思いました。

それを伺いながら思ったのは、今、何かと言えば、我々が分断されてるからだって、おっしゃってましたけど、その分断されている状況、具体的にその何がどう分断されていて、じゃあ、その分断を乗り越えて力を合わせていくためにはどうしたらいいとお考えなのか、また聞ければいいなと思いつつ聞いてました。

●Y.K.:

今のお話に回答したいと思います。そうなんです、分断されているということ、例えばですね、戦後の進駐軍、アメリカ側がね、行なった3S政策、スクリーン、スポーツ、セックスというあたりもですね。その本来、関心を持たなきゃいけないことからそれらという意味では、これも一つの分断です。約5000万人の人が投票で行かないということ、とんでもない状況が起きてるわけですね、成功しているということが言えると思います。その分断政策を、指をくわえて見るだけではだめで、団結する努力、団結する土壌をですね、作る努力をしなきゃいけないという風に私は思っています。

それで私、先ほど山梨に住んでると言いましたけれども、東京の杉並区にですね、私の姉が残した家がありましてね、梅里という住宅街の中にあるんですけども角地になっていて、非常に目立つ場所なんです。住宅街の中でも、そこに建物の塀があるわけなんですけども、そこを私は塀を壊してですね。九条碑を建てようと思っていて、それを伊藤千尋先生に相談したら、まあ先生、ノリノリで大変押しをしてくださって、またたく間にその話がインターネット上で広まっている状態で、励ましのメールとかですね、カンパの申し込みとか。今来ておりますけれども、さらに私はそのもっとその家を活用すれば、その家自体を、これも実は伊藤先生の提案なんですけども「九条の家」にしたらかどうかという提案なんです。私はそこを住宅として使う気持ちは全くありませんでしたのでその仮の名前として「九条の家」というものを作ったとしたら、日本中の九条の会は約7000あると言われておりますけど、その中心になることもできるのではないかなと。



↑「九条の家」誕生2024年10月

今、何となく九条の会もですね、7000あると言われておりますけども、実際に稼働してるのはどうだろう、かなり少ないのではないかなと想像してしまいますけど、そういう意味でもその団結をここへ来て強めるという意味で、その中心となる拠点となる、建物ができるということは非常にいいことではないかなと。

今伊藤先生に感謝してはいますが、そのアイデアを出していただいて。実はいま、その建物がずっと廃墟同然のゴミ屋敷だったんですけど、その片付け、それからハウスクリーニングの最終日で、明日はエアコンの設置日なんですけれども、やっと使える状態になりつつあります。そして私はですね、この家をですね、団結する偉大な九条の家ってしたいなと思っています。団結するってことがとっても大事だと思います。みんなが手をつなぐ、ただ単に九条の会って言うてしまうのではなくて、団結という言葉を入れるということ、九条というものがいかに偉大なものかということのアピール、このようなことがとっても大事なことだと思います。それからもう一つですね。ここに憲法手帳というのがあります。この憲法手帳は実によくできていて右側に現行憲法と左側に自民党の改憲草案、比較できるんです。憲法というのは、ただ存在しているだけでは、紙切れなんですけど、私たちが憲法を使い倒してはじめて憲法って生きるわけですね。

だから、私も憲法手帳もつようになってから、何かあるたびに、あれそれって憲法違反なんじゃないの、と思ってパ〜と見ると、やっぱり憲法違反だ、言うことが分かったりするわけで、新しい発見がどんどんあるんです。例えば中国が攻めてきたらどうするんだという脅し文句がよくありますね。これ私調べましたらね、憲法の前文、ここに「平和を愛する諸国民の公正と信義に信頼して、我らの安全と生存を保持しよう」と決意した」と書いてあるんです。「攻めてきたらどうする?」という疑心暗鬼はですね、この文章に違反するんです。諸国民の公正と信義に信頼して我らの安全と生存を保持しよう」と決意した、決意してるんですよ。疑っちゃいけないんです。「攻めてきたらどうする?」言ったとたんにはそれは憲法違反です、と、私はそう言う話が出たときには説明します。

と言う具合で、とにかく私たちがね、防衛しなければ、丸腰じゃないかっていう話があるんですけども、私たちが消して丸腰ではない。憲法という武器があるんです。私たちがその憲法という武器を使い切っていません。憲法9条を大事大事と口では言ってますけど、憲法9条をこうやって、肌身離さず持っていますか。憲法9条を、そして前文を武器として使いましょよ、みなさん、それを提案したいと思います。

●M.M.

自分がしゃべると、誤解を招くかも知れないけれど、今日の話が取り上げられるテレビの番組でコマーシャルが入ると、2分ぐらいです。せつかく話に入り込んでいるときに、全然違う笑いのものだったり、踊ってたりだったり、ああ言うのが入ると、普通の想像力って言う緊張感を維持して考え続ける、思考を続けるって言う、さっきも言ったようにどう管理するんだ、馬鹿にするんだっていうそのままだあって、考えられなくなっちゃう、で、せつかく話の続きの展開があったときに、コマーシャルのどうでもいいことが頭によぎっちゃったりして邪魔しちゃうんですね、ま、そう言う中で、こう言う深くものを考えるって言う人が育ちにくいって言う土壌がしっかり出来てるなっていうことと、誤解を招くかも知れないけど、9条のことについての個人的に多分、なんだお前はっていわれそうかも知れないけど、GHQが日本を占領して日本占領後にマッカーサーが完全にうまくやったぞということでのアメリカの上院議会でスピーチしたんです。その内容の重要なところって「日本が軍備を持たない、日本自身は戦争できないようにした、でも国防は必要だから。永続的に、いわゆる無期限に米軍が日本を管理することになった。その下地はしっかり俺がやったから」と言ったわけですね。それについて、それはだって日本でも反発くから、反発は確かにマッカーサー神社を作ったり、あがめてたわけじゃないですか。

共産党でも、一番最初に解放してくれたのは、進駐軍だから、「何と素晴らしいあなたたちは」と言ってたの。違うじゃん。それが通用するのは12歳前後の判断力しかない人たちだから。これで大丈夫なんだっていうことを上院議会で言われたそれについて、それをそのまま捉えたら、ま、そうだろうとは思っても、表にいわゆる統治状況を作って安保条約なんかを設定したり、いくつかの情報っていうのを作ったわけじゃないですか、それで日本の場合、米軍が来ることによって、当初は日本って分割される案まであったわけじゃないですか。(次ページへつづく)

資料③ 第9回むのたけじ反戦塾(2024年8月17日)の記録(4)

分割って言ったら、今あの台風が来た、あの宮城から秋田、あの北海道も含めてソビエトの管理が、九州とか山陰山陽はイギリスの管理が、四国は中国にあげようと、そういう案があって進行してたわけでしょ。それがアメリカの独断で、そんな話はあったかもしれないけど、米軍が全部管理するんだと米軍が管理するって中でも、いつまでもグズグズと8月の、8月15日終戦記念って言うても正式には9月2日が終戦日ですよ。それ自身も国民の中でしっかり理解されていないで、その時に最大の問題って第一次世界大戦の後の時にドイツがどういう目にあっただって、戦後賠償の問題、当然日本も戦後賠償を要求されるのが大前提のは分かったじゃないですか。それをかわすのにサンフランシスコ講和条約で、日本の自治は認めると、でも外交権は認めないよっていう、認めないというか、取り上げられなかったわけですよ。

でも外交ができるっていうのは何を根拠でできるのかって言うなら、日米同盟アメリカが横にいるから、例えばフィリピンなんかだあって、フィリピンで100万人死んで、日本からは50万人が死んだと、でも戦後賠償をこつ、何で放棄したのか、アメリカはこの戦争の後、ぐずぐずさせないために、日本への戦後賠償を放棄する、従ってみんなも放棄してくれて、ほんとうにアメリカってそんな都合のいいことをする国かどうかって言ったらそれは多分違うとは思うんだけど、黙ったわけじゃないですか。この間、ちょうど孫崎さんの話の会があって安保条約を廃棄するという、そういう運動してる人と孫崎さんの方は安保条約はそのまま残して改定していくんだっていう方向で、あのちょっと話がこじれるけど、安保条約を破棄したら、外交権のない日本って、どこでフィリピンなんかから、独立するようになったのかっていったら、戦後賠償、ドイツなんかで戦犯容疑者ってさ、90過ぎになっても裁判にかけて刑務所にぶち込んでるよね、時効無いよねって。そのような風潮が世の中に出来ちゃってるときに、もし皇家(?)を復活させたらさ、アメリカがそれを放棄したら、それに向き合える、それに対応できるような人材を育ててたかって言ったら育ててないじゃないですか日本は。だったらアメリカの言うなりになるのかって言うても、日本と、その事例が田中角栄が中国との間での日中講和のことをやったじゃないですか、それに対してキッシンジャーがこのジャップ、ドブネズミのような奴、こつ約束違反だって、勝手なことをしやがって、ということていわゆる田中角栄を政治の世界から引きずり降ろせという、そういう指示を一時(?)のもとで文藝春秋でも、早速、日中の関係のことを表に出すわけじゃなくて、金権の問題で引きずり降ろしたわけじゃないですか。何で、奴を引きずり下ろせ、裏切り者って、言ったのかって、それはアメリカの公文書館にも残っているわけですよ。約束違反って言った時にその約束っていうのがそれが埋め込まれてたっていう日米安保ってそういうものもセットでずっと戦後79年か、続いていて、それには触れさせないっていう約束事だろうって、個人的な想像だけど、石橋湛山、あの人も自立を訴えてたじゃないですか、あの人が総理大臣になったときだったら早いうちにあいつを処分しろって片付けられたんじゃないかなと思うんだけど、だって今でもそうだけど、主要な関係、政治の関係者とか、政治的、経済的な立ち位置の人、ほとんど日本では盗聴されてるわけですよ。何を言ってる、何考えてるのか、多少あの石橋(湛山)さんのときだったら、すぐ処分するんじゃないかって、どういう同調者がいるのかって、それまで浮かび上がらせて、それがのってくる(?)3ヶ月位で処分されたんじゃないかなって思うんだけど。そういう想像力って言うか、そういう会話は、普通はしちゃいけないんだと思うけど、ヒトラーの「わが闘争」で、日本人っていうのは想像力の欠如した奴で、完全に欠落している人たちだから、想像力がない人たちだから使うには便利だけど、そう言うのが、世界中に、日本ではそこが翻訳されてなかったけど、世界中にはそれが伝わってたわけですよ。なんかそういうようなことなんかも考えて9条の関係のこと。

もう1つはやっぱり戦争ってものすごく儲かるんですよ。経済活動の中でもものすごくお金が動く、朝鮮戦争の時でも日本が、あのありえない贅沢は、各中小企業がものすごく活性化したって、あの時に日本から、前回の時にも取り上げたけど、ナパーム弾19万発が朝鮮半島全体の中で打ち込むということは、一発の威力って、長さ80m位、横幅20m位のところが火の海になるわけですよ。

ほとんど韓国の家とか建物、ほとんど破壊したわけですよ。破壊したら、何が儲かるか、皆殺しになっちゃったら、需要と供給で人がいないところになっちゃうから、砂漠になっちゃうけどある程度いかしておくとその人たちが復活するためにいわゆる都市のインフラとか、街のインフラとか市場とか、日常の衣類から生活に必要なさまざまな家電製品だから、もう笑いが止まらない位だってこと(?)だって焼き払っちゃうわけだから、同じことをベトナムでもやってみて、自分たちがやってみて、輸出がこんなにうまくいってるって言った時に、なぜそこが買ってくれるのかっていう「戦争はダメだよ」っていうけど、戦争があったから売れてんだろっていう、そういうことに対していまでも多くの人がある関係の中でのものが動いて経済的繁栄があったんだよなっていうことをどれだけ若い人なんかにも伝えてたのかっていうその疑問ってのが私なんかはいつも思うんですけどね。

同じ話になっちゃってるからもうだいたいそんなところが。

●M.T:

一昨日の8月15日なんですけど、辻さんに誘われまして、沖縄から来た具志堅隆松さんの(靖国神社の)宣伝行動に参加してました。それで暑い中だったんですけど、4時間ほど宣伝行動してたんですけど、8月15日に靖国神社に参るといっただけいまだにま右寄りの考え方をってる人なんだろうなと思うんですが、実際に日の丸とかね、旭日旗とか持っている人も多かったんで、そういうグループも結構いましたしね。見てて面白いなと思ったのは、右派グループも、左派グループもよく乱闘騒ぎにならないなと思ひまして、アメリカとかです、この間もイギリスで暴動が起きたようにですね、結構考え方違う人たちがぶつかり合うと乱闘になるんですけど、日本人は大人しいなと、そういう感想を持ちました。むの先生の2016年のお話、有明で私も聞いた思い出があります。伝送はダメなんだと言うことでも、ほんとにその通りと思ひまして、先生が戦後、ずっとそういう発言をされてきたこと、活動してきたこと、ジャーナリズムで書いてきたこと、立派だと思って、感服しております。

内閣府の調査なんですけど、世論調査をやってみて、自衛隊を評価するという人がですね、調査の90%が自衛隊を評価するという回答してるんですね。内閣府は同じ調査で、日米安保条約をどう評価するかってことで、日米安保条約に賛成する人がやっぱり90%なんですよ。だからあの、毎日、新聞見ている(?)、戦争と平和とどちらがいいですか?と聞けば、平和がいいと答える人が100%だと思ひますよ。99%かな。だけど内閣府の調査を(?)すると、自衛隊を90%は評価して、日米安保条約は90%が評価してるんで、あの有権者が考えている平和という概念と、私たち反戦平和を考える立場の人間が考えるイメージの平和とはですね、だいぶ違うんだろうなと思ひます。自衛隊を評価するという90%の調査の人たちはですね、今、沖縄にミサイル部隊、自衛隊の部隊が派遣されて、各島、石垣島とかとか宮古島とか、与那国島とかです、ミサイル部隊が配備されている、中国との戦争をシミュレーションして、準備して自衛隊を派遣してるんですけど、そう言うことを果たしてちゃんと理解して自衛隊について考えているんだろうかというようにいろいろ思ひます。沖縄のドキュメンタリーを作っている三上智恵さんの映画を見たりして沖縄が非常にあの、戦争と平和で大変な状況にもあるんだなと思ひますけども、今もこの日本全体もですね、自衛隊を強化するために全国で130カ所の弾薬庫を作るとかですね、飛行場とか港を自衛隊が使えるように強化するとかですね、日本全体でも戦争準備が進んでいるので、そういう状況でどうしたら(1:28:45)あの私たちは自衛隊を評価したり、日米安保条約を評価する90%の人たちを説得できるだろうか、と言うところが私の今最も関心事です。どうしたら普通の一般の人々を反戦平和の方向に持っていきけるんだろうかということいろいろ考えてみたいなと思ひます。それでですね、来年が敗戦から80年と言うことで、これやっぱり各種平和団体、反戦団体が、敗戦80年と言うことで節目ですから、いろいろ活動されると思ひますね、イベントをね。それにですね、昭和から100年だそうなんです、来年は。1925年が昭和元年だと思ひますので、来年は昭和から100年、昭和天皇を賛美する人々が結構いますので、日本会議とかですね。(次ページに続く)

資料③ 第9回むのたけじ反戦塾(2024年8月17日)の記録 (5)

だから来年はリベラルグループが反戦行動に立ち上がるというイベントも多いだろうし、右派グループが昭和天皇を賛美すると言うことも来年はあるんだろうなと、いうふうに思っていて、ちょっと来年の夏はですね、反戦平和の声を大きく上げた方がいいんだろうなと考えております。

●T.I.:

M.T.さんがね、靖国に行かれたって言うのは、僕もいたんです。それで、M.T.さんが日本人は何ともなんない(?)と言われたからね、これはウソだと思うんですよ。やらないだけ、僕らが負けるだけ。沖縄の人が疲れちゃって休んでいるから、マイクを持って代わってやるよって言ったんですよ。なんて言ったかね、まず原爆の問題、原爆はアメリカが日本人を人体実験に使ったんですよ、プルトニウム型とウラン型の2つの原爆を広島と長崎を落としたんです。そう言うね、平和どころって言うけどね、事実をちゃんと伝えてないね。我々が、それでね、そう言ったらね、まわりの人がおたまたまてね、それで記者もいたんだけどね、メモ取り始めちゃった。原爆、僕の好きなゲバラさんがね、日本に来たんですよ。で、広島展(?)を見たの。で何と行ったと思いませんか?「原爆を落とされて日本人がなぜ怒らないのか」って言ったんですよ、ゲバラさんがね。で、その話もしたんですけど、要するにもっと徹底的に(?)ひどいのはね、アジアの人にも、アメリカ人は言ってますけど、原爆で平和が訪れたと、原爆落としたから日本が降参したと、これデタラメですからね。日本が降参したのは、日本政府が日ソ条約を結んでたでしょ、だからソ連に戦争の仲介をお願いしたんですよ。日本とソ連は仲良かったんだからね、形の上で。ソ連はそれを裏切って日本に一気に兵を行った(?)わけじゃね、南京(?)に攻めてきたでしょ。日本はソ連に頼んで、戦争を仲介してもらおうとして、そのソ連が攻めてきたからもうお手上げですよ。アメリカと戦って、さらにロシアとも戦ったら、勝てるわけがないから降参したんですよ。それが真実ですよ。それを全く言わない。原爆を落とされたから日本を平和にした。原爆さまさま。とんでもないですよ。あれは確実に日本を、人体実験やったんですよ。人体実験をやったってことを僕は反省しなきゃいけないんだけど、日本だって、731部隊で中国人を人体実験やってんだからね。そんなこと言えないんだけど。だけど、本当にあの731に対しても謝罪しなきゃいけないし、アメリカは原爆に対して謝罪しなきゃいけないんですよ。なぜか、あの当時から毒ガスは禁止兵器だったんですよ。毒ガスを使っちゃ。

じゃあ原爆はどうなんですか。毒ガスなんてものじゃないですよ、それをアメリカがやったわけですよ。それに対して反省も求めないで、原爆のおかげで戦争が終わったなんてデタラメを言ってさ。それを僕はしゃべったの。そしたらどうしたと思いますか。右翼と警官がばーっと来ましたよ。靖国神社の入口の前の地下鉄の前でね。沖縄の人と喋ったからね。その時、バーッと来ましたよ。その時我々どうするかっていったら、バーって、主催者が来てさ、まあまあ、まあまあ。冗談じゃないあそこで特攻隊を賛美する歌を歌ってんじゃないか、そしたら右翼の人なんつったと思う、マイクを使って聞こえるような話はしないでくれ。こう言ったんですよ。マイクを使っても人に聞こえるような話はしないでくれ。どういう意味だかってこれ。自分たちの都合の悪い話をされたら困るんですよ。そしたら主催者はなんて言いましたか。もう石垣さん止めた方がいい。ネ、冗談じゃないって言ったんだけど、また石垣が変なこと言ってる、言うから(?)僕は黙っていたんですよ。したらね、右翼とおまわりさんは帰って行った。で、右翼は何つったか、俺が言ったらね、多分帰ってからです。仲間のとこ行って「俺が言ったからあいつら黙った、黙っちゃった、それで威張ってると思いますよ。爆破ね、これは逆にネ、大いに言うべきだと思うんですよ。それはね、日本人は穏やかにすればいいってさ、そんなことないでしょ、だって日本が負けたのは、ソ連が攻めてきたから負けたんであって、原爆の、人体実験のアメリカに対して何もできない、だからゲバラさんが言うとおりのですよ、アメリカを謝罪させなきゃダメ、謝罪しないから原爆を持ってもいい、全世界で原爆持ち始めたじゃない。そうでしょ。日本はぺこぺこしてね、そういう現実が未だにあります。

武野:

先ほど、戦争をやると儲かるっていう事。それに対してむのたけじがちょっと言っていたことは、朝鮮戦争の時、アメリカの失業率が何%、5%かそれぐらいだったと思うんですけど、それを超えた時になるとアメリカは戦争するんだって。アメリカが景気が悪くなった時に戦争が必ず起きるんだってという予測法則みたいのを述べてたんです。もちろんそれは、戦争をすれば、さっき言ったように物を壊すわけですから、必ずその後、消費しないといけないからいけない、新しくつくらないといけないから物が売れるって、それが資本主義の経済原理だって、だけど要するに儲かるからと言って、戦争を肯定しちゃいけないんだと思います。それで、私たちはこの会の主張として、「戦争はいらぬ、やらぬ世へ」ってそれを追いつけているわけです。従って何を言いたいかって言うと、戦争をやった儲かるような事例(?)がなくても私たちの経済が回るような世の中、それを作っていくって言うことが、要するに、まず、差し当たり「戦争はいらぬ、やらぬ世へ」て言うような、第一の原点だと思えます。

それからもうひとつ父親が言っていた事って言うのは、戦争に関して言うんですよ。私あんまり好きじゃなかったんだけど、人を敬いなさいって言う、むのたけじの平和論って、人をだいにすること、大事にすることを最も、要するに人のいのちは非常に価値があるんだって言う言い方をしたように、非常に人のいのちって言うのは大切なものだって言うところから、反戦平和、そう言うものを失うようなことは一切やっちゃいけない、ひとを殺してはならないという論理には絶対ならないというのがむのたけじの平和論の原点だと思えます。そう言うようなことから言ってるような思いを、とくに先程の映画なんかもそう言うようなことを言っていたような思いを持っています。

●H.H.:

今日は暑いんです。どうしようかなって、ずーっと悩んでたんですけど、1週間前ですね、8月の10日、実はあの中央区なんですけど、みなさん知ってるかどうか、こう言う「平和を願う中央区民の戦争展」と言うのがありました。中央区に住んでいる人たちが、こう言う戦争展を開いたんですよ。今日、その中の講師としてきました石山直子さん、それからダニー・ネフセタイさん、これはイスラエル人です。ここに書いてあるように。元イスラエル兵士、と言うのがあるんですけど、その人の報告があったんですよ。それと映画ということで、今回の、今日の会議と同じなんですけど、入場無料で、何人集まったんですかね、50人、100人近くが来られたと思えますけれども、大きな集会がありました。それで、ダニーさん、イスラエルの人の話でも、後で時間がありましたらここで報告したいんですけども、今日はその前の石山直子さん、この人の報告をしたんです。このお嬢さんというか、お姉さんというか、若い人、僕より40年下です。1989年生まれ。この若い人が総がかり運動やっているんですよ。(そのひとが来てなんて言ったか、そのこととばく、ここに来たのですけど。そのひとがなんて言ったかへ行ったら、むのたけじです。「みなさん、むのたけじの憲法についての話を是非お聞き下さい。」なんて言ったかという、

「憲法は、絹のハンカチ、背広に入れて、こうチラチラさせるこう言うものではありません。むのたけじなんて言ったと思いませんか、憲法は使って、使って、雑巾のように水が絞って(?)使うものです。憲法を使い切りましょう」って言ってくれたんです。だから石山さんも、私も憲法を使ってこの世の中を少しでも良くしたい、戦争のない、平和な世の中を作っていくんだ、あの、分断なんかしちゃいけない、あの連合が何だか変なこと言ってる、反共路線ね。こんなことじゃ日本の選挙(?)は変えられない、みなさん自民党は政権交代できると思いませんか、こういうことをおっしゃって。これはびっくりしましたよね。こういう人がいるって言うこと、だから、僕は頻尿なんです。だからトイレに行かないとどうしようもない、で実際にこう言うデモンストレーションとか出来ないんですけど、今日の、みなさん、ここにあるように、この資料にもありますように、まわりの人の話を共有すること、まわりの人に自分の会話を伝えること、これだけでもいいんじゃないかってことをおっしゃって書いていただいて、このあたり (次ページに続く)

これからの議論になっていくと思うんですけど、このことは大切なこと、このことを通してそう言う若い人たちが、実際活動してる、運動してる実態をですね、是非みなさんにご紹介したいということですね。

もうひとついいですか。パリ五輪終わりました。早田ひなさん、卓球で活躍したひと。あの人が最近問題になってますよね。発言が問題になっていますよね。何が発言を起こしたって。九州へ行って知覧のあそこに行きたい、どうしても行きたいって言うてる、僕が知っている人も、アスリートやってる人が「早田さんは早とちりした」と。あれはね、そんなこと言うべきじゃなかったと。他の美術館に行けば良かったと言って、知覧なんて言葉を出しちゃいけない。で、これまた外国人とごちゃごちゃしている。ごちゃごちゃ起こしているのは中国人なんです。中国人にもこの話が広がっていて、いや早田さんの言うてることは正しいんじゃないかと、日本人は平和が好きなんだよ、知覧に言って、ああいう人たちが、日本国万歳と言って死んだんじゃないかって、今あるのは、平和のためだと言うことを確認しに行きたい、と言う風に理解しようとする中国人の人がおっしゃっててくれる。いろいろ話しありましたけれども、やっぱりそう言うところ、憲法の前文じゃないですけども、そういうひとたちがいるということを感じてですね、一生懸命やっていきたい、こういう風に私も思ってる人にバトンタッチします。

●I.Y.:

世田谷区から来ましたI.Y.と申します。皆さんのお話に圧倒されて、何を話したらいいのかなと思うんですが、本当に毎日憂鬱なんです。ウクライナとか イスラエルとかどれだけの人が毎日、毎日、亡くなってるのかって。戦争を続けているリーダーたちは人間の命をどう思っているのか、もう思っていない、変な頭の中になってるんじゃないかなっていうことを思いましたが。日本が戦争するような、軍備をどんどん進めていることをストップさせなきゃいけないけれども、それと合わせてやっぱり世界中の人に人間が生まれてきたらやっぱり生きていくっていうことを、大前提に過ぎしませんかっていうことを呼びかけたいと思います。で、いつもね、憲法を変えるって言う、とくに自民党の議員さんには一度あのテストをしてみたいと思うんですよ。ほんとに本当に憲法を読んでいるのか、ほんとにちょっと薄べらーい感じがするんですよ、憲法論議をしている、とくに自民党の議員なんか。ほんとうに憲法の前文を例え、国会始まる時にみんな、それ朗読するようなスタイルつくれば良かったんだなと思ったりね。読んでもるのかな、読んでもるのかな、ひとつも思っていないですよ。

(石垣: 変えることしか考えてない)、それが残念です。いろんなことお話ししたいことあるけれど、でも、とにかくまず憲法を守って戦争のない世界にしないといけないなっていうことを思います。むのさんがそういうことを見てから、あの世行きたいっておっしゃってたのが、とっても力強い言葉で、私もそうありたいと思いました。ありがとうございます。

●司会:

(途中から参加したY.S.さんに) わかりますか、今、むのたけじさんの映画を、反戦についての映画を最初に見てですね、その後、むのさんが考えてた反戦ってどういうことだろうという話からきっかけに話したんですけども、今日の話、それぞれすることだけじゃなくてですね、今、それぞれが考えてることっていう風なことで、特に今、お話あったように、毎日毎日モヤモヤしてると言うとかですね。そう言うことを…、今日は初めてですか？それぞれが自分の考えを話してと言うものですか、もしお考えのことで、何かありましたら。

Y.S.:

この間、広島とか、長崎、原爆の式典がありまして、招かれなかった方々が、イスラエルを招かなかつたら、うちも嫌だっていったら6力国位あったですよ。あれは要するに、核、不拡散条約の国ですかね。

拒否したのは、核禁止条約と核不拡散条約で、今、世界が二分されているんですが、やはり核不拡散条約って言うのは、要するに相手の国を脅しによって制圧したい、で、自分たちの国の利益を持っていたいって言う人たち、国なんじゃないかと。歴史的に見てね、今の国民が本当にそれに賛成してるのかどうか分からないんですけども、国の態度(?)としては、要するに植民地主義から抜けてないってことですよ。なので、やはり核不拡散条約も、何でも30年ぐらい前なんですかね、それでやはり、これも各国の若者とかに訴えかけて、やはり核の力で、他の国をね、威圧させようってことはもう世界的に見て良くないことなんだよと植民地主義でよくないんだよっていうことを、若者を中心に、とか不戦を愛する女性の人とか、そういう人たちにもっとあの訴えかけてそれで全世界的な運動にしていきたいなと思いました。

●S.N.:

みなさんに、いろんなご意見を聞かせていただきまして、ありがとうございます。多分ここにいらっしゃる方はですね、だいたい私と同じような年代じゃないかと思うんですけども、私たちの育ち方って自分は戦争を経験してなくても戦争経験者に囲まれて暮らしたんですよ。親とか親戚とか先生とか、そういう意味で戦争の話っていつのは別に向こうが平和教育をするつもりはなくても、常に聞いていて、だからあの戦争って嫌なもんだなっていうのが、おそらく皆さん、程度の差こそあれ染み付いているんじゃないかと思うんですよ。だからこう言う場で戦争は嫌だっていう話をする、みなさん通じてしまうんですよ。瞬時に。ところがですね、私たちの下の世代、私は子どもに戦争の話なんかしたことないんですよ。なぜかって言うと、自分は経験してないからね。する話も無いって。とくに意識的に模してこなかったんです。そうすると私たちの下の世代って、全く違うわけですよ。そうすると戦争っていうものが身近にあるものではなくてどこか遠くにあるもの、そしてそれにまあいろいろなあの情報なんかをいろんなところから仕入れてきて、気がついてみると、結構下の世代って戦争に抵抗ない若い人たちが多いいですね。だから平気でその国を守るためなら死んでもいいみたいなことを言っちゃったりするんですよ。で、その人たちに、どうしてわからないのっていう話をするんじゃないかと、じゃあどうしたら戦争っていうのは良くない問題なんだっていうのを分かってもらえるかっていうことからやっぱり考えなければいけなくて、私はその1つのとっかかりっていうのは、個人と国家の関係だと思ってるんですよ。個人で戦争を起こせないじゃないですか。戦争を起こすのは国家単位ですよ。そうすると、国家と個人の関係って言うのはどういうものかということから考えていったら何か解決策が見つかるんじゃないかと思って最近はそのことを考えております。

●司会:

今、期せずしてひとまわり話を聞いたんですけど、いつもの集まりだと、一回りすると、時間がなくなって、そこで終わりって形なんです、他の人が言ったことに対して、「それは違うよ」とか、「いや私はこう考える」というのは今までの話で、なかなかそこまでたくさん長く話す人がいますので、できなかったんで、ちょっと今日は余裕がありますので、最初に、私が考えたのは「映画を見てどうでしたか」というところで最初話をして、その後「今一番感じている危険、戦争の危険ってどういうことですか? 具体的に」という風な話を聞いて、その後「それに対して私たちは何ができるのか?」っていう風なことについてという風な段階を追ってというふうな話ができるかな、と思ってたんですけども、案外皆さん、その3つの要素をランダムに、話されてると思うんですけども、ここで逆に他の人が今は今、話を聞いてたところで何か自分はこういう風に感じとか、考えたっていうことがありましたらどうでしょうか。

(次ページへつづく)

●T.I.:

あの、ちょっと彼女が言ってたさ、若い層が育たないって。僕はその通りだと思っているんです。僕は今がっかりしているのは、市民運動はやっぱりね、インテリ層が集まっちゃうね。考えなきゃいけないのはやっぱり労働組合です。労働組合が分裂してるからね、組合に入らなくなっちゃった。僕らの頃は80%位組合員だった。今、20%以下だね。非正規が増えちゃって。だから無関心層がバーと増えちゃっている。それが原因とね。

それから国家と個人の問題って言われたんだけどね、これはそういう風に政治で仕組まれちゃってることなんです。それはなぜかかって言うと、今の若者に、再軍備に反対する人がいなくなってきたんですよ。これは、金野さんが言われてたけど、「敵が攻めてきたらどうするか」って言うね、宣伝にまさに乗っちゃってる。Jアラートなんかナンセンスでしょ。北朝鮮が攻めてきたらどうする？中国が攻めてきたらどうする？これはすでにね、ドイツのゲーリングって言う国防相が「簡単だよ」って言ってる。国民に戦争を準備させるのは簡単だよ というのは 敵が攻めてきたらどうするって言われたら、完全にね、そしたら軍備持たなきゃならない。こうなっちゃうんですよ。だからそこを僕らが、攻めてくるはずがないと、で、僕は昨日、あの話したんだけど、安倍が言ったでしょ、「台湾有事は日本有事だ」ってうまいこと言ったけどね、これほどね、中国人、台湾人を侮辱した言葉はないですよ。「台湾有事は日本有事だ」冗談じゃないですよ。台湾は日本の植民地じゃないんですよ。こういう風にして日本人喜んじゃうんだね。「台湾有事は日本有事だ」、ああ攻めてきたら日本は支援しなきゃいけない。「台湾有事は日本有事だ」っていったから、それに対する言葉平気で出てるんだ。それに対して文句を言う人がいない。安倍さん、それは、「台湾有事は日本有事だ」台湾の人をバカにしてる。完全に。中国人をバカにしている証拠ですよ。台湾のことは台湾の人に決めさせるんですよ。中国と話し合っただけで、それをみんな、「台湾有事は日本有事」台湾に攻めてきたら、日本も攻めよう。そしてもちろん沖縄も攻められるから**やろう。それは戦争論でね、引っかけちゃってるから、みんな若者は再軍備賛成。

だって僕はこの間、弁護士に文句言ったんだけどね、憲法で納税義務ってあるんですよ。税金を払ったら、その税金の使い道は払った国民が決めるわけですよ。惟主観社の、納税者の権利なんです。それを、最近石川県(?)教授も言い始めたけど、税金の使い道は国民が決める、国民が決めるってことは国会で議論して決めなきゃいけない。だから過去は野党が強かったせいもあって、(防衛費)1%もないって言うのがあったでしょ。あれ9条から来てるんですよ。9条からね。戦争が終わり、軍事費を使っちゃいけない。国民が税金を払っているから、それで抑えてたんだ。それ今すっとなんちゃって。だから、攻めてきたらどうする、じゃ税金使っちゃえ。冗談じゃないよ、僕らの納税者基本権あるわけですよ、みんなね。僕は納税しているんだから、そのお金は我々に聞いて使えて。4兆円なんてとんでもないよ、全く我々無視されている。そう言うこともありますので、個人と国家の、どうでしたか？私の意見。

●Y.K.:

戦争に関して、個人と国家というものの、境目と言いますかね。基本的にこれはね、国家であろうと、個人であろうと、人間に変わりはないわけで、国家というのは人間の集合体ですからね。僕は境目ないと思っています。つまり個人でやってはいけないことありますよね、ありますよね、ひとを殺してはいけない、人のものを盗んではいけない、人のものを壊してはいけない、犯罪です。惟国家がやったって、同じことだと、私たちは認識しなきゃいけないんです。戦争というのは、国家がやる殺人、強盗、破壊というね、大罪ですよ。私は息子たちにそういう風に説明しています。

彼らは理解しました。戦争というものはやっちゃいけないものなんだ。戦争に市民権を与えるようなごときの発言を日頃からしちゃいけないんですよ。戦争というものの存在をね、認めちゃっているんだから。ダメですよ、それじゃ、八ナから否定しなくちゃ。戦争なんて言うものはあっちゃいけない、存在してはいけないってことをネ、しつこく言わなきゃダメです。じゃないと若い人たちはね、テレビや新聞で、ああいう風に流されると、あっ戦争って言うのは立派なものなんだ、国家の行為として。とんでもない話です。僕はね、軍事大国、イコール 野蛮大国、戦争って言うのは野蛮な行為なんです。私今毎日、南麻布にあるニュー山王米軍センター(ニュー山王ホテル=在日米軍施設)前で街宣をやっていますけど、アメリカに対してものをいうときはですね、ポケットという翻訳機がありましてね、これ日本語でべらべらべらってしゃべるとね、英語で、べらべらべらってしゃべってくれるんですよ。だから英語をしゃべれなくとも、アメリカ兵に向かって抗議が出来るのです。「お前ら偉そうにしてるけど、軍事大国って言うのは野蛮大国なんだ」って僕は言ってますからね。だからそう言う認識を大人たちがしっかり持ってなければ、子供たちに伝えられないじゃないですか。そこ大事ですよ。戦争に市民権を絶対に与えちゃいけない。偉そうなことを言うな、こういう感じですね。私はそういう風に息子4人に伝えています。

●M.M.:

これ正確なことじゃないかも知れないけど、税金を使って武器を買う、でもその中で、日本って、アメリカ国債を何百兆って買ってるわけですよ。日本が、アメリカ国債を買っているって言うのは、実はアメリカにとっても戦後賠償って言う位置づけなんじゃないかな。なぜかという、橋本龍太郎でしたか、米国債を取り崩して、金に変えたいって、金に変えたいって、その金をアメリカに置いておくだけだから、あんまりって言うところもあるんだけど、それで、その一言で、いきなり200…、2000ドルでしたっけ、株式市況が暴落したんですよ。それで、アメリカから言われたのは、その発言と言うのは、戦争行為だよっていう風な位置付けで言われたわけだよ。だけど、もし債券であるならば、(防衛費)43兆円、5年であるならば、アメリカ国債取り崩してね、だって債券なら取り崩せるわけですよ。それでアメリカの武器を買おう買っている風なこととか、福利厚生費で何兆、数兆円欲しいってなっている、日本の国民のために、アメリカ国債取り崩させてくれていうことで、できてもいいんじゃないですか。そうしたら、税金としてストレートに、直近で、少なくとも(?)済むわけですよ。そういう発言って一切ないって言うのは橋本龍太郎の、多分、龍太郎さんの最後の死に方って癌だって言うけど、あれって似たようなことを言うやつを絶対許さないっていう意味合いでなんか工作あったんじゃないかなって個人的には想像してるんだけど。それってみんな思わないのかなって。

もうひとつ先程の時、言い忘れたけど、マッカーサーが言った、無期限で日本を占拠できるようにしたって言うのは、憲法9条の裏の顔だっていう風に個人的には思ってるんですよ。それは余計なことですけどね。憲法9条があるから米軍が居られる根拠でしょ。余計なことを言いました。

●M.T.:

日米安保条約なんですけども、1952年のサンフランシスコ講和条約の締結の際に、吉田茂がたった一人で、アメリカの軍事施設に連れて行かれて、そこで署名をさせられたのが日米安保条約ですね。それは9条やく(?)なんですけど、そして1960年に岸信介が相互防衛条約という名前だけ、いかにも回答(?)であるからあるかのように変えてあの新安保条約を締結してそれ以来64年目ですね。日米安保条約って10条、10(?)しかないんですよ。10条しかなくて、これをよく読むと別にアメリカ軍が日本を守りますとは書いてないんですよ。(次ページに続く)

手続きを取りますと書いてあるだけで、つまり、日本が攻撃されたら、米軍はアメリカの議会にはかって（諮って）、どうするか決めますよと言うだけなので、別に自動的に日本が攻撃されたらアメリカ軍が日本を守りますと書いてない、何が書いてあるかというと、アメリカは日本に米軍基地を駐留させる許し(?)を得たと、日本から。日本は米軍に基地を置くのを許すと、米国は日本に基地を置く権利を有する、と言うことなので、基地を置く条約なんですね。で、私は不勉強なんですけれども、基地を提供する国際条約というのは、通常はですね、この場所にとどの程度の規模の基地を置いてもいいと、その基地を置くことを許す政府が「これだけの基地をここに置いてもいいよ」と制限するのが普通らしいんです。ところが日米安保条約というのは、その制限がないんで、これは全土基地方式と言うんだそうですね。どこに基地を置こうとアメリカ軍の勝手、だから沖縄から米軍基地がなくならない、普天間基地もどうやら帰ってきそうもない、これは前泊先生が、前泊沖縄国際大教授が、今でも普天間基地は新築や改築はされているそうですから、多分返す気は無いだろう、ということをおっしゃってますね。だから私はね、日本国家としての主権がない、どこに基地を置いてもいいですよということを主権国家として決められない、アメリカの好き勝手になっている、それが最大の主権放棄の根源なんじゃ無いかと思うんです。

で、それは大変大きなマイナス面なんですけど、プラス面としてですね、私70歳になって、高度経済成長というのを60年代から70年代が日本が経済成長したわけですよ。多分私は個人史としては、この経済成長の恩恵を受けていたんだろうと思います。日本が経済成長できたのは、やはりアメリカが後押しをしてくれた、と。日本を好き勝手するご褒美に日本の経済成長を後押ししたというのが、アメリカの行動だと思んですけど、で、私たちは、そのアメリカのおかげで、高度経済成長が出来て、バブルがあって、より良い人生をこれまで送れた、と言うその、嬉しくないんだけど、そう言うような面もありまして、考えて見たら、もし仮にソ連に占領されてたりしたら、大変なことになっていたわけで、人権なんかなくなっちゃったわけですからね、曲がりなりにも憲法があって、この戦後、とりあえず平和な人生を送ってきたという、安保条約のおかげかどうか、そういうこと言っているのかどうか、よくわかりませんが、この安保条約というものの、ほんとに日本にいる(?)ものなのかどうなのか、っていうことですね。真剣に考えた方がいいんじゃないかなと。

保守系の立場ですけど、寺島実郎さんという評論家、多摩大学の学長さんですけど、寺島実郎さんはですね、番組を見ますと、ことあるごとに戦後100年になるよと、戦後100年になろうとしているのに、いまだに米軍基地が日本にあるってことはこんなことではないんでしょうかって、保守的な人が言うんですよ。だからやっぱりここで、日米安保って言うのをもう一回見直しをしてほんとに日本と米国がどのようにつき合っていくのかと、言うことを真剣に考えたらいいんじゃないかなってことを思いました。

●Y.K.:

憲法9条というのは非常によくできておりまして、在日米軍と言うのはですね、憲法9条で言うところの「その他の戦力」に該当すると私は思っています。あと、盛んに今、財界がですね、武器を作りたかっていますけれども、これも「その他の兵力」と言うことになるので、憲法違反なわけです。在日米軍そのものが憲法違反なんですね。これは砂川事件の伊達判決が大正解。あれをひっくり返した田中耕太郎が大罪悪人。大国賊ですね。おそらく日本史上ナンバー1の国賊ですね。私は先ほど言いました「杉並の家」をですね、「国賊鑑」って言うのにしようと思っただんです。最初、田中耕太郎をトップに飾ります。次は吉田茂、岸信介、次々飾るんです。これはちょっと反対されました。右翼が押しかけて、周辺の住民に大変迷惑がかかるということ。私は思い直して、逆に「9条の家」にしようと思っています。名前は9条の家という単純な名前ではなく、先程言ったような名前にしようと思っていますけれども。

それからその、日本経済が栄華を極めた時もあった、それはアメリカのおかげだっていうお話しでもですね、これはあの私はちょっと、いま『虎に翼』の彼女がね、「はて？」と言いますけれども、私は今聞いていて「はて」と思いましたけどね、かなりアメリカに邪魔されてますよね、日本の経済って言うのは。この30年間のデフレ政策も、日米合同委員会をして、僕はアメリカの指示によってね、意図的に、あの、経済って言うのはかなりの比率で意図的にコントロールできるんですよ。緊縮財政にしたり、積極財政にしたりって、手法を使えばですね、デフレになったり、インフレになったり、というコントロールがある程度できるわけなんですけども、デフレ政策によって我々は先進国中唯一ですからね、賃金が下がっているのは。これはその何が目当てかと言いますと、とにかく今、若い人たち、生きていくのが大変だと思います。軍隊に入れば、メシが食えるって言う状態を作ろうとしているんだなって、私は思っています。これだけ平和ボケしている中で軍隊に入れたってなかなか入りませんよね。それが一般人として生活していると苦しいけど、軍隊、自衛隊に入れば、楽に生活が出来ると言う状態を今盛んに作っているのではないかと、推測しております。

それからもうひとつ、つい私、喋り始めて興奮すると早口になってしまうんですけど、もうちょっとゆっくり先ほどの杉並の家をもうひとつ活用する方法がありまして、日米合同委員会の向こうを張って、日米平和委員会というのを作ろうと思っています。これはどういうことかと言いますとね、日本国民と、アメリカの国民、私は先程も言いましたけど、平和主義者が圧倒的多数だと思っています。ところが私たちは、アメリカの平和主義者と、そんなに意思疎通ができていないわけではない、だから日米平和委員会というものを作ることによってですね、日本の平和主義者とアメリカの平和主義者で手をつないで、やがてその日米安保条約と言いますか、在日米軍がいることによって、東アジアに戦争が起きそうじゃないですか。その火種を消すのも、日米の平和主義者によって消すと、言う方向を考えています。日本に在住している三鷹市に住んでいますけれども、エマにエル・パストリッチさんというアメリカ人で、日本文学の研究者がいます。その方と今、相談しながらですね、社団法人にして日米平和委員会、これを作って、先ほど私が言いましたように圧倒的多数である平和主義者がですね、手をつながなかったら何の力にもならない、それを手をつなぐきっかけ作りとして、日米平和委員会を作ろうという計画を今準備中でございます。よろしければ皆さんもご参加ください。よろしくお祈りします。

●K.K.:

私はみなさんの話、聞けてないのかも知れないんですけど、先程（の話）、憲法はずばらしいと私は思うんですけど、私八王子の出なんです。八王子にいます。有名な羽生田っているんですよ。なにしろあの人を何しろ落とそうと、それから、選挙になるでしょ、彼の息のかかっている人たちを落とそうとすることでも、いろいろ駅前とかビラ配ったりとかしたんですよ。で、そしたら、9条のことが出てきたんですよ。そしたらあの辺の近くにいた女の人たちがきーん、てやって来てね、「あんたたちのお花畑よってよ」って攻撃してくるんですよ。で、まあ興奮してるし、私も討論向かないので、ずっと聞いてたんですけど、あの「お花畑理論」ね、先程の憲法と軍事力の、ありますでしょ。抑止力がなんだかんだっていうんじゃないですか。その中が、私としても説明の仕方が出来ないんですよ。出来ないんですよ。そのモヤモヤ感がまずあります。憲法はずばらしいんだ、絶対出来るんだって言うんですけど、実際は世の中はお花畑論だあって言うのがいるのよね。軍事は、基地は拡大してもしょうが無いじゃないって言う人が攻撃してくるんですよ。街頭に立っていると、これが一つですね。

(次ページに続く)

資料③ 第9回むのたけじ反戦塾（2024年8月17日）の記録（9）

それから私も70過ぎてるんですよ。昔の中学校とか、高校とかの会おうねって言う懐かしいからって言って、ときどき会ってすけど、私としては女性がほんと、政治に関心を持ってね、動いてくれたら世の中変わると思ってます。だけど実際ね、会ってしょ、仲良しこよしだったから、だけど、私がちょっとでもこう政治のことを話してするじゃないですか、「沖縄、このあいだ座り込み行ってきたんだから」という話をするじゃないですか、話をすると、「あなた選挙に出なさいよ」って言うんですよ。そのことじゃなくて意識のある人は、どんどん出てきやいいんだ、私たち関係ないわよって言う雰囲気なんです。何人も、とくに専業主婦をずうっとやってきた人は（？）ここにいる人はかなり意識が高いんですけど、実際面倒くさいんですよ、みんな。自分の生活で。だからたとえばこの間の上川さんは期待してたんだけどね、ちょっとね。だけど、沖縄問題にしても酷いじゃないですか。明らかに隠し通しているって言うか、あの人頭いいから絶対そう言うこと分かってるかなと思って、もう誰が聞いても誤魔化してると言うのが分かるのを云ってるわけじゃないですか。でもみんなねえ、文句言わないのね。ああ聞いてないし、忙しいし、もうそういう面倒くさいところはもう誰かにお任せしているのね、感じるんです、ずっと。ここにももっといっぱい来てくれると思ったんですけど。私の希望（？）で思ったんですけど。それから、そのお任せ感と、「私は関係ない」って、高校生なんですけど、この間、高校生と遊び行ったんですね。遊びに行くのが大好きなんで。高校生が学校で井戸を掘ったという話をしたんですよ。世田谷なんです。世田谷で井戸掘った、そりゃすごい、いまPFASがこんなになってるから、世田谷もPFAS出ているんですよ。だから「あなたも学校の井戸で、PFAS調べてもらったどっか、うまくやれたら」そしたら急に彼女怒り出したんですよ。何でいいことじゃないの、データが増えるのはいいんじゃないのって言ったら。それを問題にしたらもう自分が責められてると思っちゃったんですね。もう話になんないんですよ。そう言うことがいっぱいあるんですよ。だからここではみなさん話聞きますよね、だけどいゆるこすぐに決着がつかない、モヤモヤがある、正解がわからない、誰が悪いかわからない、そういうものがこうはびこってるじゃないですか。そういうものに耐えられない若者がいっぱいいるんですよ。だからちょっとしたあの嫌なことがあるとぶいってなるとね、めんどくせえ、私、関係ないわ、あなたやったらって言う雰囲気を出してたらいいかなと言うのを思っても非常に難しいですね。ま、そう言うので、私は今の人たちにモヤモヤ感を、モヤモヤ感に堪えられる思考をね、頭の中が、アメリカの問題だって、私だってアメリカへの不信感一杯ですよ、アメリカが守ってくれるなんて嘘ですよ。ほんとに嘘ですよ。沖縄の問題がそうだし、基地問題、今ほら、自衛隊と一体化して、自衛隊がアメリカ軍の支配下に来るようなシステムができつつあるじゃないですか。私は今日の午前中の集会でそういうのを聞いてきたんです。お花畑じゃない、もっとすごい状態でどんどんどんどん日本の軍隊が出来上がってる、自衛隊なんて名前じゃない、ジャパンアーミーがね、できあがっているんだなってことをひしひしと毎日感じてます。だから、そこで憲法をどう活かすか、どう若者にね、浸透させるかとか、主婦という経済的に豊かなね、いい人たちの中では、どうやったらそういう意識を浸透させられるのかな、私もこう、びしっと論理的にできる方じゃないから、どうやって自分が動くのかな、すごく迷ってます。

●H.H.:

とってもいい、お話しばかり続いていますので、あれなんですけど、先程、九条の家の中に、日米平和委員会をお作りになるうとこれ、実はですね、今朝のニュースですね、ご存じでしょうかね、新外交イニシアティブというのができてますね、ご存じですね。これ何十人、国会議員なんです、市民じゃない、国会議員なんです、日米の国会議員同士が、日米の両首脳に平和外交を勧めるって言うことをしていこうという取り組みが始まっていますので、やっていただければ、いいんじゃないのかなと思えました。後で資料をお渡しいたします。

それでももうひとつ言いたいことはですね、先程私言いかけていたダニーさんというイスラエルの元兵士がなんでガザにあのような攻撃をしているのか、ていうことなんですけど、これはですね、イスラエルって言うのは、選ばれた民、だから選ばれた民が選ばれた土地であるイスラエルに土地を持って、そこに土地を持たない異教徒、イスラム教徒ですね、パレスチナ人は人間と思ってない、どんどん蹴散らしてかまわないんだと、その土地から出ていってかまわないんだという思想の持ち主、イデオロギーの持ち主がイスラエルなんです、こうイスラエルの人たちが自分で考えたわけなんです。それで本を出すんですけど、元イスラエル兵士、イスラエルって言う国は18歳になったら徴兵制があって3年間、男性だけでなく、女性も2年間軍隊に行かなければいけない、軍事教育を受けるわけなんです。軍事教育って、みなさん、何かと言ったらなんだと思います？イスラエルの元兵士が言ったんですね、なんで戦闘機があると思ってるんですか？戦闘機って言うのは人を殺すため、ものを破壊するため、軍隊もまさしくそうなんです、これは上意下達、教官の命令に一般の人は反抗することはできない、従わなければいけない、完全に軍事教育に丸く収まってしまふ。その時渡されるのは旧約聖書。旧約聖書を兵隊たちが持っているわけですよ、何がアラーだとなるわけなんです。それにみんなあのナチスによって彼らは虐殺されたことで、欧米にいやな気持ちを持っているわけですよ、だから長崎の原爆記念日の時に、長崎市長がイスラエルを呼ばない、みんな反対して、政治利用するな、なんて言って、来なくなったって言うのは、欧米人もイスラエルの方を組み入れているわけなんです。で、これは軍事教育ですね。

もうひとつ、イスラエルの大きな問題って言うのは、教育なんです、学校教育。学校教育の中で選民思想、我々は選ばれた民なんだってことを1年制の時から教え込むわけですよ。こう言うのがあって、今のイスラエルがあって、ジェノサイドって言われていますけれども、人を殺して平気だって言う思想が叩き込まれている。これをイスラエルの兵士は、徴兵制が終わって、日本を選んで、日本に定住するわけなんです。日本に住んで40年、何が気に入ったかっていいたら、憲法9条なんです。こんな国あると思わなかったって。ここへ来て、気づいたと言ったかもしれない、何を言っていたかという日本は戦前、八紘一宇、日本は選ばれた国、まさしく同じことを言ったわけですよ。これで我々は学校教育で、八紘一宇の世界、全ての地球を帝国のもとに全て支配することが出来る、我々は天皇の赤子なんだって言うことを叩き込まれた、だからああいう戦時体制ができあがってしまうわけですよ。だから恐ろしいのはみなさん、体制どころじゃない、教育からですね、我々は洗脳されつつある、それは学校教育、学校の先生が反抗できなくなってきたってしまっているという実例は一杯ありますよね。君が代斉唱の問題もそうなんですけれども、で、そう言う中でですね、何をやらなきゃいけないかって言うことを考えなければいけないのかなと思ってますね。以上です。またあったら補足します。

●T.I.:

あの、今話を聞いてね、思うんですけど、裏に宗教があるんですよ、ドイツ人はユダヤ教を追い出したわけ、それを今度は反省したわけでしょう。ユダヤ教をさまざまに（？）にしちゃって、イスラエルに国家を認めただけでしょユダヤ教のね。僕はドイツに行って、ドイツの平和教育ってすばらしいって言ったんですよ。ほんとに***の平和博物館、平和記念館なんてあってね、すばらしいんですよ、あれはね。僕は言ったんだけど、今、それが誤ってたと分かったのは、ドイツはなんとね、イスラエルに武器を輸出してたんですよ。それで、もう、メルケルさんが「イスラエルとドイツは一体だ」ってやっちゃったの。それも僕知らなかった。今一番怖いのは、ドイツとイスラエルが、ユダヤ教とキリスト教なの。それで排除するのはイスラム教なんです。 (次ページに続く)

だからパレスチナには、ドイツがやったと同じように、ドイツ人はユダヤ人と結婚しちゃいけないって言う決まりを作ってたんですよ、ヒトラーの時。今イスラエルがなんて言ったかという、イスラエルはイスラム教と結婚してはいけないと。て言うことで、ドイツがやったことをまさに、フランスでもそうですよ、キリスト教とユダヤ教はいいけど、イスラム教は追い出しちゃうっていうね、そうやったのは日本もそうですよ。天皇家のね、天主教以外はみんな追い出しちゃうって言う、それを政治家が政治に利用してるんですよ。そこをきちんと押さえなきゃいけないと思いますね。

それからね、さっきあの安保条約もいいんじゃないかって言われたけど、僕は、安保条約を日米平和友好条約に変えるべきだと思うんですよ。安保条約は一年前に消えるんですよ、あれ条文に書いてありますから。安保条約を日米平和友好条約にするってことを僕はちゃんとやる必要があると思うんですよ、だって今、日本の空がね、日本の飛行機、飛べないだもんね。全然そういう意味では主権がないですよ。どなたかが言ってたけど、だからほんとうに日米の友好条約を結ぶ、平和友好条約を結んでね、

だけど、それは、その前にやらなきゃならないのは、日朝平和友好条約ですよ。日朝平和友好条約を結ばなかったら話にならないですよ。

きのう靖国神社行ったでしょ。何が目立ったと思いますか。靖国神社に行ったら、まず、だーっと入口のところまで、あれをやりました。拉致問題。拉致問題をやって署名をしるって、そういう北朝鮮がいかにひどいかっていうこと言ってた、僕は、朝鮮問題ちょっとやってみるけど、日本に朝鮮から動員した人どの位いるかご存じですか？117万人ですよ。それでその117万人のうち、労働動員が80万人、軍務動員が37万人ですよ。これで117万人。それを知らないんだね、みんなね。拉致問題だけやってるわけ。だからほんとに、僕ら日朝平和友好条約締結と言ってたけど、戦後補償全然やってないでしょ。韓国に対してはやったわけだ日本は。北朝鮮に対してやってないじゃない。中国はね、毛沢東がいらないっていったからね。やらなかったんですよ。だから今アメリカのねらいは、アジア人同士を戦争させるってことを考えてるんですよ。完全にね。沖縄のミサイルを並べたのはアメリカ兵はひとりも死なないで、日本人とアジア人を喧嘩させようって。そこら辺はもっと、そうやって日本の平和を考えて行かないかや行けないんじゃないかと思います。

●M.M.:

すみませんね、流れから外れちゃうんだけど。ひとつに1990年代の下旬にアメリカ国務省が日本とドイツを経済的敵国っていうあの指摘を一般に公表したんだけど、それを受けたワシントンにいた日経新聞のその支局長で、田中さんからその話聞いたときに、日本にそれを連絡したんだけど、それは国民に知らせるニュースとしては記事に出ないでいいっていうことで、新聞に載らなかつたんですよ。でもドイツでは、アメリカがそういう方針に出たっていうことであの国民に知らせてるんですよ。それはどういうことだったかって言うときに、その時に外務省の情報局長だった孫崎さんもそれは聞いた、だけどそんなに重要なことだとは思わなかった。どういうことかっていうと、特別扱い今までしてたっていうのをやめたっていうことは、単純なイメージだったらフルフライトの留学生とかなんかって、日本から行ってないじゃないですか、若い人あんまりイメージできないかも知れないけど、竹村健一とか、まるでアメリカのメッセンジャーみたいないろいろなことを平気で言ったり、会う言う人たちが言うのは、日本で、もう彼は用ないって、それから特別、アメリカなんかへの留学生なんかの特別配慮も一切なくなったわけだよね。それで2006年位の時に良く話題にされたのは、ハーバードに日本人の留学生が1人しかいなかった、東大から行った一人しかいなかった、中国や韓国、タイの人たちって言うのは、どんどんどんどん優遇してアメリカが受け入れたって、その時に、その時の小泉純一郎って今時世界の中でいるけどあの人、郵政民営化って言って総理になったじゃないですか。

郵政民営化したよね。してどういうことになったのかっていいたら、プレスリーのメガネもらってさ、郵貯の預金を博打場に流すようになったじゃないですか。

で、郵便局の「かんぽ」、あれガタガタになって、郵便局の各所にアフラックが入ってきたわけですよ。だからそのアメリカの言うなりに見事やってくれたわけだよね。それから後に、安倍の時に黒田日銀総裁にしても、ゼロ金利だって言う、俺はしたくなかったんだけど言って。ゼロ金利にしてどういふことになったかという、ほぼあの無理して日本から金を引き出されるから、日本の株式のどんどんどん、いわゆるウォール街の投資ファンド系が買い占めて、で、方針としてアメリカで起こったことと同じように日本の主要企業の工場を手当たり次第に中国に移転させちゃったじゃないですか。中国、タイ、移転させて、そういうことをやってくれた小泉純一郎って、今度は進次郎さん、息子がね、小泉さんのイメージをみんながちゃんと理解しないで、そのままあの息子だし、良く意見言うし、っていうことで、そのままやったらさ、日本の経済が良くなるわけがないじゃないですか。それについてのことを知るべきだったんじゃないかなって。だいたい今でも経済的敵国扱いはわけだからね、日本とドイツは。

あともうひとつ、イスラエルのこの理解でイスラエルが今やってることって全然あそこの国の問題じゃなくて、人類史(?)の中でああいうことってしょっちゅうあったわけですよ。アメリカの建国ってどういうことって言った時にあのよそから入ってきた人たちが、インディアンを手当たり次第に駆逐して土地を奪い、国を作ったわけじゃないですか。その時の手法って、今イスラエルがやってることと同じでしょ。

なおかつ自分たち日本人だよ、あの右寄りの人たちなんかね、天皇陛下がって言ったって、日本の場合で起こったってこともほぼ同じだっていう風にイメージ、ほとんどの人がしてないじゃないですか。石器時代、縄文時代の人たち、ずっと生きてきましたよね。だけどその人たちの遺伝子って今の本州の中で、上野の科学博物館の館長さんの篠田さんが遺伝情報を取り上げたら1割もないんですよ。ていうことは、百済、新羅、高句麗、中国から手当たり次第で日本に渡ってきた人たちが、いわゆる大和朝廷の中心であり、今の源氏物語で取り上げられるような、あの時の官僚、平城京の時だったら10万人ぐらいの都市ですよ、そのうち(官僚は)1000人ぐらいでしょ、そのうちの半分以上は百済系の落ち延びてきた人たちじゃないですか。その人たちが100年くらい他って、700年代位の時に東北の原住民と言うか、今までの縄文の頃からいた人たちって、どういう扱いを受けたかかっていいたら、カッパとか、生ハゲとか、で、夏だったら毎年「ねぶた」っていうのがあった、「ねぶた」であの祭って何って言ったら蝦夷(えにし)の人たち、原住民の人たちを最後にあの捕まえてって穴ぐらに放り込んで、死んでようが関係なくて埋めちゃって、脇で(?)寝るなよっていてラッセララセラって上で踏み固めるって言うそう言うお祭りですよ。だけど民俗学って言うのが日本であるって言うても、知っていても皇国史観で、いろんなものを飾るからイメージできないんだよね、楽しいよね。だって竿灯祭りだって提灯で何って言ったときに、首でしょ。お前たちもこうなるよってあの自分たちが住んでたところの土地に戻ろうとしたらお前たちこうするよっていうことで首をみんなにこう見せつけて戻るなよっていうそのお祭りですよ。ちゃんとさ、結局日本人で想像力無い奴らだなんていわれるのは、ひとつひとつ、それが正解じゃないかもしれないけれど、でもオペラでブッチーニが「トゥーランドット」で殺した処刑してね、殺したら魂が星に向かって飛んで行くんだって、あれ提灯で表すって言うのが、アジアの文化だよって。ヨーロッパの文化史の中ではそういうのが語られてるんだけど、日本の中ではちゃんと向き合っていない、それ考えると、振り返ってイスラエルで起こってることって、自分たちの歴史の中でも刻んできたことじゃないかって、いまだにカッパって言うてさ。(次ページに続く)

カッパの葉草が一般の人に役に立つてことは同じ人間だからじゃないですか。普通に想像できれば、頭が禿げたりしたとしても、それは栄養のバランスの関係かも知れないですね、そういうことって、もっといろいろな身近なところでも歴史が残ってるんじゃないかっていう向き合い方ってのもっとできたらなと。

で、イスラエルのやっつること絶対おかしい、絶対悪いおかしなことだけど人類史ってそんなことばっかやってきたよって言う、もう、だってアメリカの中でインディアンなんか本当に、未だにあのインディアンの大統領候補なんか一人もいないし、議員だって本当に少ないじゃないですか。あの、歴史の中に眠っていることって、みんな、いろいろ向き合えたらなっていう風に思いました。

●Y.K.:

先ほどのお花畑の、私なりのね、答えですけれども、そういう時はですね。私だったらじゃああなたはどうか考えてんのって言う考え方を聞こうと思います。ま、多分、答えが出てこないんじゃないかなと僕は想像しますけれどもね。考えてないですけどね、だいたい。お花畑論ではないんですよ、現実論なんですよ、という風に僕は答えたいと思います。で、そもそもさっき私が戦争に市民権を与えちゃいけないというね、戦争って言うのは、そもそも論で行けば、もう徹底した悪なんですよ。この世に存在してはいけない現象なんですよ、戦争って言うのは、人殺しだし、人を殺すというのは、完璧な人権侵害ですからね。これ以上の人権侵害無いんですよ。よくちょっと前に「なぜ人を殺しちゃいけないの」という妙な質問がありましたけれど、これは人権侵害だからですよ。そのあなたが殺される立場に立ってごらんささいってことで、僕は多分 回答になるだろうと思うんですけどもね。戦争は人権侵害であるということと戦争は最大の環境破壊であるということ、僕は「戦争否定論」は言えると思うんです。

それでそれを言っても理解できない、それでそれを言っても理解できないということはもうちょっと議論の余地がないなという感じがしますけれどもね。今度そういう風に言ってみたらどうですか？納得できませんか。

●K.K.:

それでは向こうを説得できない。

●Y.K.:

あーそうですか

●K.K.:

(向こうは)抑止力のことばかり考えるからね、軍備がね、複雑になっていくし、ひどくなるってことはわかるんですけどね、でも彼女たち、私のところに来た女の人たちは、「攻めてきたらどうすんだ」まずそうですよね。

●Y.K.:

だからさっきも私、言いましたけれど、「攻めてきたらどうすんだって言うのが憲法違反なんだよ」って言う説明。

●K.K.:

それじゃ納得させられないじゃないですか。

●Y.K.:

納得してもらわなきゃ困る。全て主権者国民で憲法を、逆ですよ、憲法をまもらせる義務があるんですよ。

●K.K.:

だからそう言う風にそっちを説得するかを考えるんですよ。そのあたりを。向こうがそういう風に言うてくるのをね、と言うことですか。私はどういう風に言ったらいいかなって。

●S.A.

さっきT.I.さんか、M.T.さんかどちらかがおっしゃってたと、思うんですけど、攻め込んだらどうするんだって言うその前提の部分に、疑問を投げかけるしか無いと思うんですよ。じゃあどこが攻め込んでくるんですか、と。まず北朝鮮が攻め込んで狂っていったら、何のために北朝鮮は日本に攻め込んでくるんですか。北朝鮮にすれば、日本を攻撃する必要性って言うか、積極的な理由って無いと思うんですよ。あるとすれば、北朝鮮が日本にミサイルを撃ち込むのは、アメリカが北朝鮮の体制を潰そうとした時なんですよ。だからほんとに北朝鮮にミサイルを打ち込んでもらいたくないんであれば、アメリカに北朝鮮の王朝を潰させないようにすることだと思ってるんですよ。金正恩がいたって、北朝鮮の国民にとって不幸なことなんですけど、韓国にとってもアメリカにとっても別にその北朝鮮、金王朝が続くことって言うのは、問題ないんですよ。だけど、アメリカが何で、北朝鮮を潰そうとするのか分かりませんけど、北朝鮮を潰そうとする、金王朝を潰そうとするから、潰そうとすれば反撃するために、在日米軍を潰すために北朝鮮は日本にミサイル打ち込むわけですよ。北朝鮮に攻め込ませない、北朝鮮が攻め込もうとするんであれば、それを阻止するために一番大事なのはアメリカが北朝鮮に戦争を仕掛けないようにすることが、まず大事なんです。

で、今度は台湾有事の話になると、台湾にしても、中国にしても、お互いに経済的に依存し合っている関係なので、米中も一緒ですけど、経済的に依存し合っているんで、戦争することのメリットっていうのは、とくに経済面言えば、中国にとっても、台湾にとっても、戦争することのメリットってないんですよ。だから中国が仮に台湾に攻め込む自体があるとすれば、それは台湾が中国から完全に独立しようとする時なんですよ。これ、**勢さんだかか書いてましたけれど、台湾の国民ていうのも、独立、これも完全な独立なんて求めてない。これもだからやるべきなのは、アメリカがけしかけて台湾が独立、完全独立をしようとするのを抑えることなんだと思うんです。そうでなければ中国も、北朝鮮も別に日本に攻め込んでくる必要なんか無いわけですから。

で、あともう1つは、日本が攻め込まれる、繰り返しになるんですけど、アメリカが、アメリカが中国を、北朝鮮を、攻撃するとか、アメリカが台湾の独立をけしかけた時にその戦争になるわけですから北朝鮮がアメリカに日本に攻め込んでくるのをやめさせるもうひとつのあれは、在日米軍に出て行っていただくことですね、やっぱり。在日米軍が出ていけば、北朝鮮が日本を攻撃する理由なんてないわけですよ。(木谷:でも出ていかないとダメなんで)だから在日米軍が出ていかないのであれば、アメリカが北朝鮮を気持ち潰さないようにすることが大事で。在日米軍がとどまることを前提としないのであれば、その先は主権の問題とかで、これで、日本は関東の航空管制権を持ってないんですよ、アメリカの日本の上空をコントロールしてるのはアメリカ軍なんですと、で、そういうまあいろんな日米地位協定の矛盾なんかを言って、そんな主権のない日本の国でいいんですかと、国が大事だ、日本が大事だと言うんであれば、主権が今、アメリカに奪い取られてるような、日本国でいいんですか。で、そうじゃないんだったらやっぱり在日米軍に出て行ってもらう、そこまで行かなくても、今の日米安保条約を見直してやっぱりその日本の主権がちゃんと担保される、維持されるようなあの条約に変えなきゃいけないんじゃないですか、そっちが保守的な政治家や保守政治がやるべきことじゃないかって言うことを言うのがいいんじゃないかなと思うんですけど。 ●K.K.:

でもそういう一連のあれに、向こうが耐えられるか、わかんないですね、短いあれでバツとくるんだから。それで、あの私は、台湾有事が気になったんで、台湾に遊びに行きました。様子を見に。でもそんなの無い。だから、日本政府とあれ(安倍が?)煽っているんだなって思いましたね。

(次ページに続く)

資料③ 第9回むのたけじ反戦塾(2024年8月17日)の記録 (12)

もう本当にそんなムードじゃないですね。ガイドの人にも、いろんな人にも聞きましたけど。まあそういうのを思います。それからあのイラク。アメリカがイラクに攻め入ったじゃないですか。あれも、フセインをやっつけちゃうと言うか、あのあたり、(大量破壊兵器)それからウクライナの時ですね。始まる始まるってニュースで言ってたじゃないですか。で、あの近くでずっと軍事演習をしてたじゃないですか。もうあれが発端なんですね。もうやる準備なんですね。そう言うのが始まるって、戦争が始まる。デアの、日本の戦争だってそうじゃないですか。満州だって。あそこるところからずっと軍事演習を始めてそれからいろんな機会(?)がなってしまうんですけど、大々的に攻め込むという常道というか、そういう名目のもとに動きを始めるのが戦争の始まりみたいな感じが私はこの頃思いますね。だから煽っているっていうのはよくわかりましたけど、他の人には伝わらない、まだ。

●Y.K.:

北朝鮮のミサイル発射について、立憲民主党の小西ひろゆき議員が国会で発言しているんですけども、あれはその日米合同軍事演習が先にあって、それに脅威を感じて北朝鮮が撃つってということなんですね。だからそれはそのテレビとか新聞の報道が日米合同軍事演習を小さく報道して、北朝鮮、ミサイル撃ったことを大きく報道して、先ほどのゲッペルスのあれじゃないけれども、国が攻められていると言えば、日本人は戦争する気になるんだという演出をやっているわけですね。それ勘違いしないようにした方がいいと思います。ごめんなさい

●K.K.:

それがいろんな人たちを動かしてるわけでしょ。

●Y.K.:

他の人どうですか、意見を言って下さい。

●S.A.:

これはあの、さっきおっしゃった保守的な女性たちに言っても全然、共感してもらえないんでしょうけど、北朝鮮のミサイル発射で、アメリカが北朝鮮を攻撃するのをやめさせなきゃいけない、それを押さえなきゃいけないっていうことを申し上げましたけど、そういう意味で言うと北朝鮮が今、ミサイル開発、アメリカ大陸まで届くように見えないようなミサイルができた、完成したみたいなこと言ってますよね、僕は怒られるかも知れないけど、良かったなと思うんですよね。これで、核抑止が成立したんですよ。アメリカは、今までだったら一方的に北朝鮮を攻撃することができましたけど、もうこれでアメリカも勝手に北朝鮮を攻撃することができなくなりつつあるんですよね。これはまさに抑止で、安定したんだと思います。

●K.K.:

抑止があると言うことですね。

●S.A.:

そうです、そういうこと、だからいいことじゃないんでしょうけど、米朝の戦争の可能性は下がったと思いますよね。

●K.K.:

でもまた上がるかも知れないでしょ。軍事力の。だっていつもイタチごっこじゃないですか。

●T.I.:

北朝鮮が攻めてくるって言うことはありえない。北朝鮮は攻めてきたら、北朝鮮はすぐ潰されちゃいますよ。はっきりいって。そんなことはみんな、そういう人に教えればいいじゃない。北朝鮮が攻めてくるって言うことはありえない。北朝鮮を、戦争しないためには、食料がたないんだったら、日本は食料を送るべきだよ。平和になることをやればいいわけじゃないですか。

それは「攻めてきたらどうするか」っていうことに対しては、攻めてくるはずがないと、攻めてきたら北朝鮮潰れますよ、間違いなく。ダメな自衛隊だってね、北朝鮮位攻められますよ。はっきり言って。そんなことは北朝鮮は知ってますよ。だってお米がないんですよ。お米がなくてどうして戦争が出来るんですか。

そんなことをネ、だって僕はもちろん金正恩が間違ってるって思ってますよ。だって、軍事力でもって国を守るなんてのはおかしいんだから。平和でもって国民が今一番大事なのは食料で、食料があって、文化があって、スポーツをやって楽しくやる、それは政治でしょ。だから北朝鮮は攻めてきたらどうするって、それはあなたは本当にそう思うんですかって聞きたいと思います。攻めてくるはずがないですよ。攻めようがないですから。そこがものすごく大事なことだと思います。

●K.K.:

思っているのはですね、どう、そうですよって説得するかがですね。なんですけど。

●司会:

私はすごく大事な事だと思います。納得させる、納得させるためには自分が納得しなきゃいけないんですよ。

●K.K.:

私としては、攻めてこないと、

司会:

知識としては納得してるかもしれないけれども、どういう風にして納得させるか私お話を聞いて思ったんですけども、あのお花畑とかそういう言い方っていうのは相手の口を封じるための言葉ですよ。考えを言わせないために攻めてきたらどうするんだも同じなんですけども、相手を封じようとして言う言葉なんですよ。そんな言葉にめげる必要は全くない。お花畑でいいじゃないかって。

K.K.:

納得しないわけですよ、向こうは。

●司会:

だから私は、今日いろんな話聞きましたし、今までいろんな話を聞いたんですけども、まず自分が聞いて「へえ知らなかったな」とか、「あ、そうなんだ」という風な、あの話が出てきた時に、それを大切にしたいと思うんですよ。これはああいう人たちにも話せる話だな、とか、今度はさっきもありましたけれども、「こういう風に聞いたらどうですか」とか「こういう風に返したらどうですか」という話も含めてですね、それを集めてですね、それこそさっきの共有じゃないですけども、自分は「こんな話聞いてきたよ」とか、あるいは、「こんな本にはこういうことが書いてあるよ」とか、いろんな知識であったり、そこでの表現であったり、そういったものを活かしてですね、そういった自分たちの、説得できる、あるいは別に、やり込める必要はないと思うんですけども、話していける。まあ話ができないっていうのは現実にあると思うんですけども、でもそういう材料を仕入れていいたらどうかなと思うんですけど、AはBであるって言うんじゃないで、それこそ本当かなっていう感じにでもこんな話もあるんだっていうところしてるんだと思うんですね。

●S.N.

K.K.さんのような経験って、みんなしてると思うんですね。K.K.さんのような経験、つまり無関心な方がすごい多いっていうこと。(K.K.:そうです、そうです)それで、そういう人たちに話をする時にですね、あなたは知らないだろうから教えてあげるとかね、説得するとかっていうのは相手に見えてしまうんですよ。そういうあれで言っちゃうと、向こうはやっぱり聞きません。(次ページに続く)

資料③ 第9回むのたけじ反戦塾(2024年8月17日)の記録 (13)

ですので、私も心がけていることなんですけども、まず相手の言うことをよく聞くってことなんです。言うことをよく聞いて、ここがちょっとおかしいんじゃないかなと思ったら、そこから突破口を、でも、多分、それで終わらないと思うんです。相手は多分、納得しないまま終わると思うんですけども、そういう話をいろんなところからその人が聞いたらね、その人は考えを変えるかもしれないですよ、っていう風に私は思っています。

●武野:

わりかし、ある意味ではつまらないって言う話なんですけども、要するに、私たちはね、こういう自分たちの様子に国はどういう動きをするかっていうこと、ほとんど議論してこなかったっていう、だからこそそのためにここで反戦塾っていう形で、みんなで討論して、もしそう言うような人がここに来たら、やっぱり私たち、同じような考え、今、非常に皆さんとはとても良いお話をしてくれてるし、国際情勢に対しても非常にきちっとした認識を、共通項を持っているわけですよ。

だからそう言う意味では、この会が、だんだんだんだん人数が少なくなってきた、熱が入って充実した形になってくるんだけど、人数が多いとなかなかこういうような形できないんですけど、皆さんが議論していくって環境ね、やっぱりこれからも頑張って作っていききたいし、そういうような環境の中でそういう人たちも入ってもらえるような間口を広げていければ、なんとなく締めちゃったけどごめんなさい。

●司会:

この前から割とお話しかみ合ってきた感じなのは、やっぱりさっきも話がありましたけれども、その中で私代わりと感じたのは、さっきも話がありましたけど、少数の戦争主義者、それはあの資本家だっている人もいれば、いろんな言い方するんですけど、戦争をすることによって利益を得る人たちと言ってもいいかと思うんですけど、為政者に分断されているって話がありましたよね。統治は分断でやっていくって。

イギリスがインドを分断して、そして統治していくとか、いろんなところで今までのそういう統治の仕方、あるいは分断して、争わせて権力を残す、みたいな形の。あれはすごくいろんなところで言えることだだと思います。今の日本の政治もそういう分断をどんどんしていくと、方やそこでこう結びつくっていうことを外していくと、例えばさっきも出てましたけど、北朝鮮の問題であるとかあるいは中国を敵視する上での政策であるとかそういうものって、ほんとうはすごく、この間の、前回の時も、北朝鮮でこういう話、こういうことが起きているって話を聞いたっていう発言がありましたけれども、なんかあのひとつの、煽っているのと同じようなですね、作られているものってすごく感じて、それによって若い人っていうか、いろんな人がその気になっちゃってるっていう全然自分たちは自分たちで考えてっていうことじゃなくて、今、ネットを見れば本当あの北朝鮮なんてひどい言われ方っていう感じで、それはやっぱり、例えば北朝鮮の人であるとか、日本から北朝鮮に帰った人の話を聞けばそんなことはないっていう話もまたあるんですけど、あるいは中国でもそうですね、中国でこんなひどいことがある、ひどいことが行われているってことが、「中国もロシアも嫌だけだね」っていうのが中国について何か言うときの頭の言葉に、「どちらも嫌だけれどもね」っていう感じで、どれだけのことを知ってるんだって言ういたくなるような枕詞になってるわけですよ。(3:09:28) sお言うのってほとんど情報的に与えられ、あるいは教育の中でも考えることをさせないでっていう風なことも、分断の仕方なんじゃないかなと私は思うんですけども。ですからそこそこで、さっきお話があったように、どういう風に話していったらいいのかとか、どういう風に納得してもらったらいいのかとか、あるいは考えてもらえることができるのかっていうような材料を、この後も話の中で皆さんとやっていきたいなと思うんですけども。そういう中で例えば本当にあの北朝鮮の人とも話したいし中国の人とも話します。

普通の人ですよ、一般の人がどう考えているのか、あるいは国内で意見が違う人とも話していきたいと思ったり、話して、お互いに考えて、「あ、そうかな」っていうところができれば、少しはもっと良くなるんじゃないかなと思うんですけども、そういう形でまともに入りたいと思いますよ、どうでしょうか。

ちょうど時間で、最初始めたときには、今日の話はもつかなって、心配したんですけど。何とか時間になりましたので、ありがとうございました。

■これまでの「むのたけじ反戦塾」(上映の記録)

2022年3月21日(休)

むのたけじ地域・民衆ジャーナリズム賞 受賞の集いプレ・イベント「映像とお話の会」

■参考映像『むのたけじ100歳の不屈 伝統のジャーナリスト次世代への伝言』

■お話:今に生きる『たいまつ』の姿勢と思想 佐高信さん
2022年8月21日(日)

●番組上映『まだ101歳むのたけじ—戦争を殺す日まで』

●「いま戦争と改憲の危機に私達は何をどのように闘うか」

佐高信さん 中垣克久さん 愛敬浩二さん 阿部美砂さん

2022年10月10日(休)

「むのたけじ反戦塾」設立準備会

●『笑う101歳×2 笹本恒子 むのたけじ』上映

●河邑厚徳 監督のお話

2022年12月18日(日)

第1回 むのたけじ反戦塾

●参考映像『NHKスペシャル「日本人はなぜ戦争に向かったのか」

2023年3月12日(日)

第2回 むのたけじ反戦塾

●参考映像『100歳、叫ぶ 元従軍記者の戦争反対』

2023年7月6日(木)

第3回 むのたけじ反戦塾

●参考映像『100年インタビュー ジャーナリスト

むのたけじ』前半

2023年8月26日(土)

第4回 むのたけじ反戦塾

●参考映像『100年インタビュー ジャーナリストむのたけじ』後半

2023年11月23日(木・祝)

第5回 むのたけじ反戦塾

●参考映像「むのたけじ100歳のつどい

『ジャーナリズム・メディアの再生～戦後70年・未来への課題』(66分) 2015年4月制作

2024年1月20日(土)

第6回 むのたけじ反戦塾

●参考上映:秋田県立秋田明徳館高等学校PTA主催特別企画「99歳のジャーナリストむのたけじ先生講演会『若い人達に伝えたいこと』(108分) 講演:2014年3月10日

2024年3月20日(水・休)

第7回 むのたけじ反戦塾

●参考上映:「99歳のジャーナリストむのたけじ先生講演会『若い人達に伝えたいこと』(108分)

講演:2014年3月10日

2024年6月15日(土)

第8回 むのたけじ反戦塾

●参考上映:「むのたけじさんを囲む会」

(中帰連平和記念館2014年6月11日)

2024年8月17日(土)

第9回 むのたけじ反戦塾

●参考上映:「2016年憲法有明集会でのむのたけじさん反戦の訴え」TV番組「まだ101歳 むのたけじ—戦争を殺す日まで」

資料④ プレ会から始まった塾の第1回から第3回「むのたけじ反戦塾」のまとめ (1)

プレ会から始まった塾の第1回から第3回「むのたけじ反戦塾」のまとめ

この反戦塾の根は「むのたけじ地域・民衆ジャーナリズム賞」を手伝ってくれていた花崎哲さんの「この賞の冠になっているむのたけじを知りたい、知らせねば」ということでした。そこで、2022年3月の第4回授賞式の前にむのたけじのドキュメンタリー映画と親交のあった佐高信さんの講演会を催しました。むのたけじの7回忌にあたる2022年8月21日には「むのたけじと考える憲法」ということで関連するドキュメンタリーを見て、佐高信さん、愛敬浩二早稲田大学教授、造形作家中垣克久さん、立川市議阿部みささんを招いてのパネルディスカッションをしました。10月「むのたけじ反戦塾設立準備会」として、映画「笑う101歳×2 笹本常子 むのたけじ」を上映し、その監督の河邑厚徳さんを迎えて、むのたけじを撮った理由などを伺います。

こうして「むのたけじ」を知るようになっていくのですが、同時に2022年2月に始まったウクライナへのロシアの侵略が始まった戦争は一向に収まるどころを見ません。その中で「戦争はいらぬ 戦争をやらぬ世へ」へのむのたけじの思いを繋げよう、むのたけじが晩年秋田県湯沢市で開いていた「平和塾」にならって、勉強会を開こうということになります。ただ、今は平和ではないということで「むのたけじ反戦塾」と名付けられました。

命名されても、どのような中身にするかで悩みはありました。準備会するとき「みんなで話し合うと言っておきながら、それをしていないのでは」という意見をとりあえず大事にして進めることにしました。講演者、パネラーがいますと、その人が中心に進みますので、むのたけじが出演するドキュメンタリーや講演会の映像と、討論の参考になる手元資料を配布するだけで参加者みんなに話してもらおうことにしました。しかも、テーマ設定はありましたが、その縛りは緩く、皆さんにいろいろな話をしてもらおうようにしました。話し合いの中で方向性を見出してもらおうと良いように考えたことがあります。しかし、そうしたところまでは行かなかったようです。そこで、毎回皆さんが話し合ったことを文字起こしして、次の手元資料に載せることをしました。こうすることより、それ以降の会で議論を深めてもらうようにして、これまで9回開催されてきました。

そこで話し合われたことを文字起こしで読み返しますと、まだ、体系づけられておられないが、まさに市民の発言です。こうした自分たちの生活から来る専門家でない人の意見はとても大事なことだと思いました。そして、まさに、むのたけじが「みんながまず声を出す」ということを体現しているものです。

戦後80年にあたりこれまでの議論を踏まえて何か発信しようという声がありまして、このたび反戦塾の発言を整理することをしました。そこで改めて読み返してみますと、回を重ねるごとにみなさんの発言がむのたけじが唱えた「戦争はいらぬ 戦争をやらぬ世へ」に向けて、より濃くなっているように思いますし、その内容が3回ごとに段階を踏んでいるように思います。そこでこれから3回ずつまとめを掲載できるようにしたいと思います。第1回分については第7回反戦塾の手元資料に掲載したものと重なる部分があることをご了承願います。

第一回むのたけじ反戦塾は12月18日に開きました。

講演者なしでどれだけの人を呼べるか、不安の中での開催でしたが、円形に座ると会場いっぱいになる30人程度が集まりました。このときの話し合いの参考になればとして提供した映像と資料などは以下のとおりです。

むのたけじが出演しているNHKスペシャル「日本人はなぜ戦争に向かったか」というドキュメンタリー映画。

岩波新書「希望は絶望のど真ん中に」から序章「歴史の歩みは省略を許さない」です。主な内容は、むのたけじの人生を振り返りながら、ジャーナリズムの本来の任務について/昨今「新しい戦前」という言葉がよく聞かれるが、日本の現状はすでに過去に幾度も経験した道歩んでいるという思い/憲法9条について遅すぎた目覚めということで、憲法9条に関して晩年に気がついたことについて/などが書かれています。

その他に、むのたけじの年表、著作目録、亡くなる前年に日刊ゲンダイで語ったことの記事を提供しました。日刊ゲンダイの記事には「今後予想される世界情勢と、それが嫌なら「英雄待望論」ではなく自ら声を上げよ」という内容です。

話し合いの主な内容

参加者の中には自分が話すものとは思わずに様子が違うという人もおりましたが、全員が日頃思っていることを話してくれました。

討論は自己紹介的ものから始まりましたが、その発言を見ると、集まってくれた人たちの多くがいままでいろいろな活動をして、すでに発言している人たちのようです。その中には今までも心に残っているむのたけじの言葉をあげてくれた人もいました。

「子どもに対して子守歌は寝かしつけるように歌われるが、もっと子どもが覚醒するようにしなければならぬ」(N.M.)

「恋するとは心を変えることである、自分を変えることで相手を変えたいという願望である」(I.K.)と。

また、「交戦権と軍隊と兵器の所持は、国家であることと条件で有り、資格だ」と「希望は絶望のど真ん中に」の序章に書かれていることを指摘したこともありました。このことは米国にお前たちは国家に値するようなものではないから憲法9条が日本に突きつけられたと言うところでのむのたけじの発言ですが、戦争をなくそうと主張をしているむのたけじらしからぬ発言だと疑問の声があがったのです。とりわけ、岸田政権が軍備拡張を推し進めようとしている時です。後半はこのテーマを中心に、むのたけじの著書「希望は絶望のど真ん中に」の序章「歴史の歩みは省略を許さない」を参考にして進められました。

参加者の中からも、憲法9条の戦争放棄は幣原喜重郎のアイディアから始まったのだから、憲法9条はアメリカから押し付けられたものではないと言う説を話された方もおられました(C.I.)。だが、むのたけじは歴史的事実関係ではなく、欧米、連合国側が憲法9条をどのように見ていたかを伝えたかったのではないかと(M.T.)。それを日本人はただありがたがって、それをさらに強いのにするような努力をできなかったことを言いたいがための発言ではないかと。実際、むのたけじは戦場も、戦後の動きも全て見ているわけで、そうした経験からの発言ではないかと。

さらに、9条を生かして平和にするための方策に関連する発言として、むのたけじの「世界は一つになれる。次第に一つになりつつある。人間が長く地球に生きて行くにはその道しかない」と私は感じた」を重く捉える発言がありました(S.T.)。国境をなくして、地球人として生きていくことも良いヒントのように思います。

日本に関して言えば、敗戦時、「ひとつは憲法9条が連合国に宣告された死刑判決だという屈辱ということ、それからもうひとつは日本が自ら再生を図るための輝かしい『道しるべ』という理想の両面を突きあわせねばならなかった」(K.S.)という発言がありましたが、このことも大切に考えていくべきことのように思いました。

初回話し合いはこのように実に充実したものでしたが、結論を得るようなものにはなりません。ここで問題になった9条に関する目覚めに関しては次の第二回反戦塾でも深められていきます。

第二回むのたけじ反戦塾は2023年3月12日に行われました。

このときの話し合いの参考になればとして提供した映像と資料などは以下のとおりです。

むのたけじを扱ったNNNドキュメント「シリーズ戦後70年100歳、叫ぶ元従軍記者の戦争反対」で、秋田での活動を含んだ内容になります。

岩波新書「希望は絶望のど真ん中に」からは第一章「現在を刺す700万年の歩み」を取りました。ここでの内容は、人間性の本質が4つの側面(①独立歩歩、自主独立、②性格は頑固だが、謙虚で慎重、③個体の個体への尊重、④改良・改善・変革を求め続ける執念)があるが、どのようなことからそうなったかを語っている。

資料④ プレ会から始まった塾の第1回から第3回「むのたけじ反戦塾」のまとめ (2)

しかし、農耕創始以後、本来の人間の本质からずれ始めているのではないか？そのことは吉野ヶ里遺跡が語っている。女性主導の世へ、若者中心の世へ向かわせなければならぬと語っています。その他、むのたけじの憲法に対する考えについて述べてくれた2022年8月21日に行われた準備会での憲法学者愛敬浩二早稲田大学教授の発言、平和構想会議の提言の記事です。

話し合いの主な内容

全体をとおして、「第3次世界大戦に向かっているのでは」という危機感を話す人が多かったことです。その上で、平和を維持していくにはいろいろなことを学んだり、経験したりせねばならないということを書ける人が多かった。例えば「いまの最大の課題は戦争をなくすことで、その問題意識を持って、近現代史を学ぶことが必要だ」(T.I.)「3年前にウクライナを旅行したときの経験などから、必ずしもゼレンスキー大統領の言うとおりでなく、ウクライナ国内にもロシア領になった方が良いという人もいた。だから、現地の実情は流れてくる情報が必ずしもすべてをあらわしているとはかぎらないから、現地を見ることもだいじであること」(K.S.)、「地球が世界大戦になってもおかしくない状況では、Judith Eve LiptonとDavid P.Barashという人が書いた「平和を通じて培われた力」というオックスフォード大学から出ている本の第3章にコスタリカ非軍事化に集中した章が参考になるのでは」(H.I.)などです。

また、H.Nさんは寺島実郎さんが東京MX TVで「今戦後78年ですが戦後100年の2045年のときに日本にまだ米軍基地があるんですか」と言ったことに注目していましたし、歴史総合という教科書の質問で「なんで日本は戦争を始めたのですか」というのにどう答えますか」ということを指摘してくれましたが、もっともな話で、こうした議論の必要性も感じました。

司会者が「憲法第9条にしても、敗北者に対する死刑判決に等しい宣告の中に、自分たちと人類みんなの真実の喜びに至る道を見たであろう、そのことが、絶望のど真ん中の、そのどん底にこそ不滅の希望が輝いているんだ」と第1回の時に話題にしたことをもう一度深める話し合いをしようとながした。それに答えて、「軍隊で国境を守って、国民やその財産をまもり、都合が悪くなったら先制攻撃をするというような国家でなく、どうして生活をしていけば、平和で戦争をおこすことのできないような国にできるかを、1945年8月15日直後に考え、総括しなければならなかった。受け身の9条ではできなかったというように捉えた」(H.I.)。こうしたいろいろな話が出た後に、司会が今までの議論をまとめて、「死刑判決に等しい宣告の中に」の後に続く言葉、そのところが絶望のど真ん中のそのどん底に 不滅の希望が輝いている」と、この本の題名の由来にあることから、先の戦争のない世界に向かうべきだということを書けるように思います。さらに憲法9条の第2項からむのさんのいう近代国家としての要件満たさないということを書けるか、この点からも、先に述べた米軍基地をいつまで残しておくかを真剣に考えねばならない問題との指摘もありまして、憲法9条に関連してすべきことがさらに深められました。

「希望は絶望のど真ん中に」の第1章を読んで気がついたこととして、こうした戦争のない世界を作るには、母系社会という指摘があったことで、女性の出番ということもみんなで議論がされました。また、岩波書店でむのたけじの本の編集に当たったことのある坂巻勝己さんの想い出話などもありました。

第三回反戦塾は2023年7月6日に行われました。

このときの話し合いの参考になればとして提供した映像と資料などは以下のとおりです。

「100年インタビュージャーナリストむのたけじ」の前半が上映されました。

「希望は絶望のど真ん中に」第2章「農耕の中からなにゆえ戦争が」(前半)。戦争を軸にして歴史の歩みを古代から現代に見た時、戦争をするようになったのは農耕創始が始まり、富が蓄えることができるようになった5000年前くらいからで、ごく最近のことになります。

そのときから日中戦争に至るまでの戦争の中身の変化を解説しています。戦争は人類史のスケールで見ればごく最近のわずかな時だけに起きていることだから、やめられないことはないという考えです。

そのほかに比企丘陵から掲載された「揺るぎなき民意が戦争を止め平和をつくり出す『コスタリカの非軍事化』を読んで」などの資料が提供されました。

話し合いの主な内容

この回はロシアがウクライナに侵攻して1年5ヶ月ほどになり、なにかと話題が出て。ウクライナ戦争を特別視するのに違和感を話してくれたりしています(K.I.)。そうしたことも影響してか、反戦という運動があるけど盛り上がってこない事情

(Y.S.)があるのかも知れない。また、ロシア系ウクライナ人との交流を通して、ウクライナの国内事情の複雑さを話してくれる人もいた(K.S.)。

団塊の世代はベトナム戦争に遭遇しているけれど、映像の世紀などで、その当時のマクナマラ国防長官の表と裏を徹底的に描いたドキュメンタリーを見てみると、とんでもない嘘をついているなど、印象深いものでした(K.S.)こうした発言を見ても、戦争というもの表面的状況ではわからないもので、より深いところを見なければ本質にたどりつけないものであることがわかる。だから、こうしたものを追いつけることを職業としているジャーナリストの必要性がわかる。だが、現状はどうなのか、掘り下げているか、なんか足りないような気がする。

そういったところで、戦争の準備をしているのではという状況が大いに伝えられた。

まず、ウクライナののの舞になつてはいけなないと、防衛予算を5年間で43兆円にし、攻められたとき防ぐから一歩先んじて攻められそうになった時敵基地を攻撃する能力を持つようとしています。そうした目的か、米軍とともに、自衛隊も、沖縄、石垣島、南西諸島、先島にどんどんミサイルを増やしている。もはや、戦争を想定している動きのように思える(Y.S.)。また、国内をみれば、立川飛行場に陸上自衛隊のオスプレイが飛来し、周辺の人々は墜落の危機感を持っている。米軍の横田基地から出ていると言われていたPFASなどのことも思うと、沖縄の状況も自分おこととして考えられる(S.A.)。

さらに元防衛研究所の幹部で大学の先生になった人に、「今の状況だと、中国が台湾位攻め込んだら、日本も巻き込まれるじゃないんですか、巻き込まれる危険性がありますよね」と聞いたら、「巻き込まれるとかの話は昔の議論だ。日本はもうすでに最前線に立っているんだ。もう日本は逃げられない」と答えられた。そういう認識で、防衛政策が進められていると考えたと、やっぱり怖いなというように思いました(S.A.)。

こういう状況でどうするか。

コスタリカの非軍事化に向けた努力のことが役立つのではないかと。コスタリカではお母さんが小さい子供に「1ドルのお金を何に使う？ 社会福祉に、それとも、文化事業に、それとも戦争に」と話しているという。子供とお母さんお関係性が、その後のコスタリカの非軍事化につながったのではないかと(H.I.)。

日本に関して言えば、横田基地のあるところに住んでいる人は、今市議会を傍聴して勉強を始めている(Y.K.)というような話もありましたが、身近な問題に関心を持つことも大事なことのように思います。また、今年は関東大震災100年ということで朝鮮人虐殺に関連する講演会などがたくさんありました

(H.N.)が、過去の加害の歴史向き合うことも大切なように考えます。

憲法を変えようとする議論は、その出発点が「攻めてきたらどうするか」ということになりませんが、そのような危機感があるんだとしたら、それをなくすために話し合うとか、することがだいじではないか。ミサイル発射実験などをたくさんして危機感を持たれている朝鮮人民共和国とは、拉致問題で戦後補償もしておらず、国交回復もしていない(T.I.)。大増税して軍備増強をする前に国家間で友好関係を築くなど努力すべきことがたくさんあるのではないかと。

話の特集

企画・構成 矢崎泰久

462集

たいまつ



新モンローが必要では

むのたけじ
西 矢吹申彦

アメリカ大統領選挙候補者が民主・共和両党で進行中である。日本の報道機関はその状況を逐一報道しているが、おそらくこの国家も同じような状況で関心を示しているだろう。選ばれるのはアメリカ合衆国という一国の指導者であるけれど、それは同時に世界に影響を及ぼす大統領であると言え、他の国の指導者の選挙と違う側面があるのだ。

アメリカ大統領が世界を指導するような立場になったのは、私の記憶によれば、第一次世界大戦での消耗により、イギリスをはじめとするヨーロッパが衰退するのにあわせてである。そうしたことから、アングロサクソンの直系の長男であるという気負いがアメリカをそのようにさせているのだろうと私は思っている。

そこで、私のアメリカに対する見解です。私は、今から35年ほど前に、妻とアメリカを東西横断する旅行と南北縦断する旅行をそれぞれ10日くらいかけてした。妻は、この雑誌が発売される4月8日のちょうど11年前に亡くなったが、アメリカはいやな思いをすることもなく、とても感じの良い国であると言っていた。その思いは私も同じで、世界に開かれた自由な天地であるということ肯定するものであった。

それに加え、アメリカ大陸の内部には、まだ手が付けられていない、開拓開墾できる有形無形の領域がいっぱいあると感じた。アメリカ社会は、これらのところに光をあて、花を咲かせることの方が、よその国に手を出すより先ではないかと思つた。

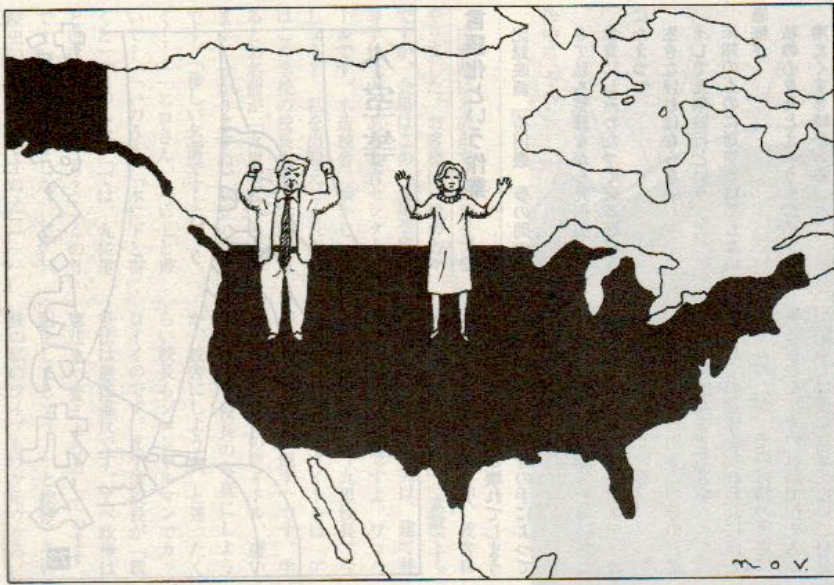
そこで、アメリカの外交政策を振り返る。私の判断では、1823年のモンロー大統領の「モンロー教書」に示されたものが、基本となつて、20世紀前半、わかりやすく言えば、日本の真珠湾攻撃まで、多少の揺らぎがあつても、続いていたように思う。つまり、アメリカ合衆国はヨーロッパ諸国に干渉しないが、同時にアメリカ大陸全域に対するヨーロッパ諸国の干渉にも反対する政策です。外国に干渉しないで、国内を開拓開墾して国力を増した国なのです。だから、アメリカ合衆国はその政策にもう一度立ち戻つてほしいと思いを強めている。

そこで、今進行している予備選挙のことに移る。民主党のクリントンさんは新鮮な魅力が薄れてしまつている。共和党のトランプさ

んは一人として話題だらけの存在のようで、こんな人が大統領になつてよいものか、アメリカ社会も揺らいでいるようですね。魅力に満ちた新鮮な候補が出て

こないのは、オバマ政治の反映でもあります。オバマ大統領の登場は、アフリカ系出身との関係でノーベル平和賞があたえられるほど世界が平和になると、大きな期待をかけた人が多かったかもしれませぬ。しかし、その点は期待はずれでした。世界政治の問題はもうそんなことでは解決しませぬ。

世界はどこでもデモクラシー政治の本質と現実の仕組みとの矛盾で行き詰まっています。現在のアメリカ政治の動きを見ているとわかりませぬ。アメリカに見られる課題はもろろん日本政治にも当てはまる。いずれにしろ、お二人のどちらが大統領になつても、日本との外交関係でも、経済関係でも新しい希望が生まれる可能性は全く見ませぬ。



ジャーナリズムの道をこれまで80年歩き続けてきた経験から考えるのですが、世界情勢の現在の行き詰まりを打開するには、各国の20代30代の男女の決起が是非必要だと考えている。そこにつながる動きがアメリカの大統領選挙に見られないのはなぜ?

世界情勢に対する私の思いを繰り返すことになるが、2010を数える世界の各国は他国に対して、あれこれ文句を言う前に自分の国の内部を洗い清めて、整理することに全力を注ぐべきでないか。こんなことを日本の一老人に痛感させるアメリカの大統領選挙はやっばり世界の動きと結合しておりませぬ。

「週刊金曜日」二〇一六年四月八日号一〇八三号より転載